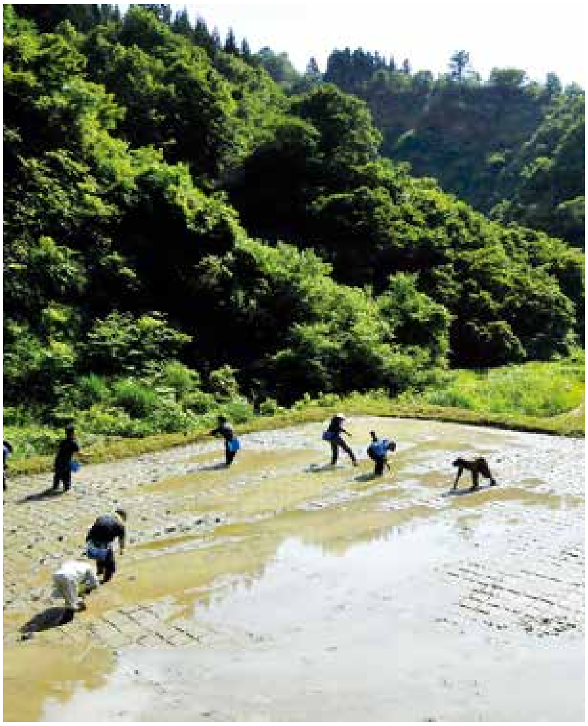
地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA

52
2018年

特集
住民と移住者が協働して ふるさとを未来へ



住民と移住者が協働して
ふるさとを未来へ
●特集企画に寄せて

▲北海道むかわ町／映画作りを指導する崔洋一監督

▲鳥取県三朝町／五右衛門風呂を体験する子供たち

▲秋田県藤里町／高齢者と語る藤里社協の菊池まゆみ会長

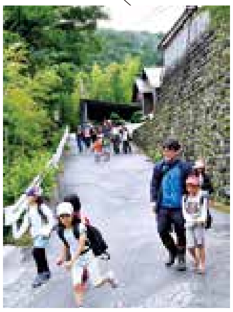
▲秋田県小坂町／「あきた森の宅配便」を営む田中奈津子さん

▲福岡県上毛町／移住･交流の拠点「ミラノシカ」

▲宮城県気仙沼市唐桑町／気仙沼みなとまつりに参加するペンターン女子の皆さん

▲宮崎県綾町／農作業を終えて休憩する「お助けマン部隊」の青年たち

▲奈良県東吉野村／仁王像を制作する仏像彫刻師・安本篤人さん



▲山梨県早川町／釣竿づくりに向かう子どもクラブの親子たち

▲新潟県十日町市／子供たちも田植え体験

近年、全国各地で消滅してしまう集落やムラがあると各種データで示されているが、対象となる地域は危機感を逆手にとって、様々な対策や活動を進めている。対象とならない市町村や集落でも、創意工夫で地域のリノベーションに当たっている。時間はかかるが、そんな地域は未来へ向けて確かな足取りで持続していくに違いない。

まずは、住民意識の変革である。農山漁村は食料やエネルギー等国民に最も必要なものの生産供給地である。「農業漁業では食べていけない」意識から「農業漁業で食べて儲けていく」気運になってきた。その一翼となったのが都市部から農山漁村に移住してきた人たちである。田舎には豊かな自然と海山の豊饒な恵みがあり、十分生活できることを住民に伝えた。地域おこし協力隊の活動も大きな力になっている。

十日町市の小さな集落に移住した多田朋孔さんは、今後地域がめざすことは「地域内において、生活に必要なものを循環・自給する、楽しいコミュニティがあり、顔が見える関係を築く、地域外部とは、お金やモノがやり取りされる、継続的に人の行き来があること」と述べ、都市と農村の協働については「常に外から人が来ている魅力あるムラづくり、都市からの来訪者は単に〝お客様〟ではない、手を取り合って、これからの地域社会のあり方を楽しみながら一緒に模索したい」と言っている。

今回は、さまざまな形で地域にこだわり、切磋琢磨している人々と出会うことができた。

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

でぽら DePOLA

NO.52

●もくじ

特集/住民と移住者が協働して―ふるさとを未来へ

特集企画に寄せて――2

■U・Iターンして地域を元気に

・池谷を集落再生のモデルに
NPO法人［地域おこし］ 新潟県十日町市――4

・山の暮らしを子供たちへ、未来へ
［日本上流文化圏研究所］ 山梨県早川町――8

・自給自足・循環型の暮らしを提案する
［いちまいのおさら］ 鳥取県三朝町――11

■Iターン女子、地域からの報告

・愛する唐桑の、明日への応援団
［ペンターン女子］根岸えま 宮城県気仙沼市唐桑町――14

・これからの暮らしを実験する
［みらいのシカケ］小林未歩 福岡県上毛町――18

■ふるさとをリノベーション

・クリエイター等が集う［オフィスキャンプ］
奥大和の里に65名が移住
奈良県東吉野村――22

・山の恵みと食文化をおすそ分け
［あきた森の宅配便］
秋田県小坂町――26

・有機農業を即戦力で支える
綾町農業支援センター［お助けマン部隊］
宮崎県綾町――29

・俺たちに明日はない!? 過疎の町で100年残る映画づくり
［田んぼでdeミュージカル］
北海道むかわ町――32

・家を出よう、仕事と仲間が待っている。
藤里町社協の自立支援策
秋田県藤里町――36

■INFORMATION 39

・旅する大工集団「パーリー建築」（新潟県十日町市）
・ウミガメや身近な魚と触れ合う「むろと廃校水族館」（高知県室戸市）
・［全国過疎問題シンポジウム 2018 in やまぐち］

編集後記 奥付

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities（人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体）からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいますが、国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」（でぽら）を発行しています。

●表紙写真

上/竹を伐って釣竿をつくり、保川でヤマメ釣りを楽しむ「子どもクラブ」の親子（山梨県早川町）
左下/NPO法人地域おこし主催で田植えイベントをする池谷集落（新潟県十日町市）
右上/オフィスキャンプに来て打合せや仕事をするクリエイターたち（奈良県東吉野村）
右下/マンゴー栽培園で。農家の作業を手伝う「お助けマン部隊」の青年（宮崎県綾町）

▶山の田に向かう田植えイベントの参加者たち

U・Iターンして地域を元気に

池谷を集落再生のモデルに NPO法人「地域おこし」

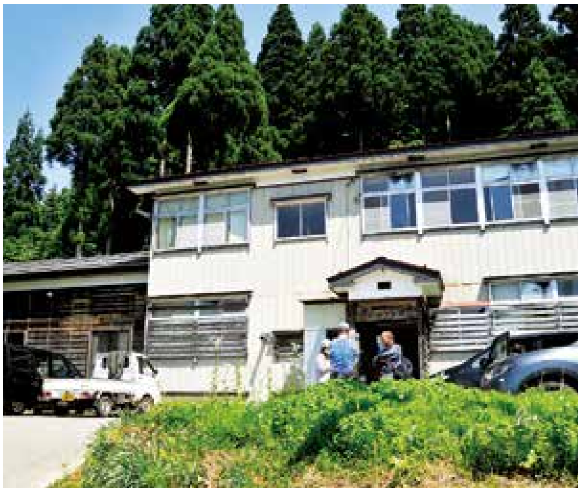
新潟県十日町市（とおかまちし）

田植えイベントに20数名が参加

6月2日に池谷で田植え体験イベントが開催されると聞いてNPO法人「地域おこし」（以下「地域おこし」）の拠点になっている「やまのまなびや」へ出かけた。池谷では新潟中越地震以来、国際協力NGO「JEN」や山本浩史さん、多田朋孔さんらが運営する「十日町市地域おこし実行委員会」（平成29年より特定非営利活動法人「地域おこし」に改名）が年間を通じて数々の体験イベントを行っている。田植えは「山菜を楽しみ尽くす会」に次ぐ春のイベントで、午後1時には首都圏や新潟市等から子供を入れて20数名がやってきた。

「やまのまなびや」は池谷分校を平成17年より「地域おこし」が市から無料で借用し、交流施設として改修したもので、都市交流の活動拠点としている。古いがよく手入れされた木造体育館は子供たちにとって格好の遊び場のようだ。埼玉県から毎回参加す

十日町市の北東部にある池谷集落は全国でも有数の豪雪地帯。昭和30年代には37世帯211人が暮らしていたが、徐々に流出が続き、さらに平成16年10月に発生した新潟中越地震の影響で、平成21年には6世帯13人になった。池谷から奥地にある入山集落は平成元年に廃村した。震災復興支援でボランティアが集落に入り、NGO、NPO等が支援活動を始めたことから、集落住民の意識が変わり、さらに東京から多田朋孔さん一家が移住したことで、現在11世帯25人に。集落を持続し十日町市を元気にする活動が行われている。

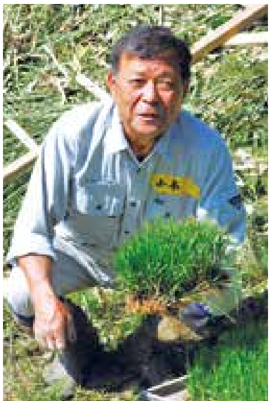


▲池谷分校を改修した「やまのまなびや」

▼田植えイベントの参加者が体育館に会して

◀田圃へ向かう家族たち

▼「地域おこし」代表の山本浩史さん（左）、事務局長の多田朋孔さん



▶池谷・入山で栽培される魚沼産コシヒカリ「山清水米」

▲池谷集落。右手の建物が「やまのまなびや」、下の家が多田さんが借りている住居

る茂木一美さんが、今回は3人の息子一家を引き連れて参加したため、若い夫妻と幼児の姿が目立つ。川越市から参加した美容師の阿部さん母娘、新潟市から来た加藤さん一家、東京からは日野さん、井上さん、黒田さん、自宅は大阪だが埼玉の会社に赴任中という池田さんら、殆どの人が池谷には何回も足を運んでいる。

参加者が簡単に自己紹介したあとはスタッフの挨拶。まず入山集落出身で「地域おこし」代表の山本浩史さん(66)が挨拶した。入山集落に隣接する市街地に移住したが、入山へ通って250aの水田を耕作する農業のプロである。東京から池谷のイベントに通い平成22年に池谷に移住してきた「地域おこし」事務局長の多田朋孔さん(40)。多摩市から4年前に移住してきて、「地域おこし」の米作りを担っている馬場豊さん(32)と愛知県刈谷市から2年前に移住してきた森孝寿さん(41)。飛渡（とびたり）地区の地域おこし協力隊員・安藤直人さん(26)、十日町市に魅せられて平成23年に移住し「地域おこし」の事務や情報発信を手伝っている福嶋美佳さん、そして多田さんの奥さんで3人の男の子の母親である多田美紀さん。今日は夕食・交流会の準備のため集会所の厨房で働いている。

参加者は夕方から行われる交流会参加料込みで3000円を支払う。夏の田の草取りや稲刈り等にも参加。秋には池谷ブランド米「山清水米（やましみずまい）」がプレゼントされる。

池谷・入山の棚田で育てた「山清水米」は全国的に知られる魚沼産コシヒカリで、「地域おこし」が高齢農家から田んぼを引き継ぎながら減農薬栽培に取り組んでいる。

2時半から車に分乗して田植え会場へ向かう。青葉若葉が目に刺してくるような快晴日、緩やかな坂道が続く雑木林の中のS状の道を10数分行くと、左手眼下に大小の田圃が現れた。冬には3m以上の雪が積もる場所だが、春になると解けたミネラルたっぷりの水が大地に浸透していく。水生昆虫等の棲かで、夏にはホタルが乱舞する幻想的な場所とか。殆どの水田が機械化作業が出来るように整備されているが、地震で崩壊した畔もあったという。ここはすべてが新潟県の特別栽培米の認定を受けているため、農薬や化学肥料は殆ど使わずに栽培し、残留農薬はゼロ、収穫した稲は一部はざ掛けする。藁（わら）は塞ノ神で珍重されているようだ。

多田さんが耕作している水田2枚が今日のワークショップの舞台として用意され、田の表面にはラインが引かれ、稲苗が各所に用意

▼多田さんが農薬・化学肥料不使用で栽培している一番広い水田

▲田植えの前に多田さんから段取りを聞く

◀ちびっ子も田植え体験
▶農業担当の馬場豊さんと森孝寿さん

▲今年4月に策定した「3年後のビジョン」のスケッチを手に。後列左端が多田さん、中央が山本さん（「地域おこし」提供）▼池谷集会所の建物

されていた。早速作業開始。田植え用の長靴に履き替えて作業をするベテランがいる一方で、泥に靴を取られて全身泥だらけの人も。恐る恐る泥田に入ったちびっこたちも、やがて眼を輝かせて田植えを体験した。

作業は2時間で終了、植え終わらない場所もあったが、後で多田さんらが点検する。最後に皆が沢の水で手足を洗ってくつろいでいる時、畦道を走って取水口へ行く多田さんの姿があった。聞いてみると、「僕個人でも45ａほどの田を耕作しています。最近は各地へ出かけて忙しいんですが、田畑の仕事はとても楽しい。息抜きにもなるし思索する場所にもなります」と言って、次の田へ走って行った。

集落を存続するモデルになる多田さんの移住

池谷集落の活性化を点火したのが多田朋孔さん。大阪出身で、京都大学を卒業した後、コンサルティング会社に入社して深夜まで働く生活を5年間経た後、東京で人材育成や組織開発の仕事に関わる。しかしリーマンショックによる世界的金融危機を見たとき、現代の経済社会に危うさを実感した。農業や自給自足的生活に関心を持った多田さんはNGO「JEN」が主催する池谷集落のワークショップに参加した。

そこで出会ったのが、美しい自然と人々の温かさだった。十日町市地域おこし実行委員会(当時)の山本浩史さんから「日本には消滅の危機を迎えている集落が1万ヵ所もある。もし池谷に移住者が来てくれて存続できれば、各地の集落に夢を与えられる」と言われた。

さらに十日町市は、地域おこし協力隊を早くから導入し、定住率が69％(全国平均は47％)に達していることも驚きだった。3年後に定住した隊員は31人、家族を入れると59人が定住している。

移住を決断した多田さんは、市に協力隊員になる申請をして、奥さんと2歳の子供を連れて真冬の2月に池谷に移住してきた。後で交流会の食事の支度をする奥さんの美紀さんに聞くと、「2月の一番厳しい時期を知ってきたかったのかもしれませんが、移住には当然大反対でした。でも言い出したら聞かない人で」と苦笑する。

横にいた地元の婦人が「ご主人はうちらの話をよく聞いてくれて、それをサッとまとめてしまった。頭がよくて物知りで、行動力もすごいよ」と言う。

というのも、協力隊員になったばかりの多田さんは池谷地区住民の集会に現れ、いきなり「5年後の未来について話しましょう」と語りかけた。住民から「分校の体育館を交流施設にしたい」「地場産物を加工したり販売する場所が欲しい」等の意見が次々出る。それらを〝未来予想図〟として特大の模造紙に書き出した。この要望は市やNGO等に提出して助成金等を申請。その結果、分校の体育館は多目的施設に整備され、任意団体だった地域おこし実行委員会はNPO法人になり農業青年たちを雇用できるようになった。平成27年には農業後継者育成住宅「めぶき」が集会所の隣に新設された。

「めぶき」の建設は住民参加のワークショッ

▲交流会開催に合わせて料理を作る曽根さん、庭野さん

▶玄関先でご飯を炊く多田さん

▲田舎料理を堪能する安藤直人さん、多田正和君（手前）

▼調理を終えて、左から庭野ヒサさん、多田美紀さん、曽根イミ子さん、福嶋美佳さん

◀魚沼コシヒカリが栽培され続けてきた池谷集落の棚田

プ形式で行われたが、建築費に1500万円が必要。「地域おこし」と池谷集落の自己資金、市の助成金等の他にクラウドファンディングや寄付金で賄うことができた。現在、3人の農業青年が居住している。

今年4月には「自分たちも高齢なので5年先だと長すぎる」という住民の声を反映して「3年後のビジョン」が策定された。住民は地域の未来に夢を感じ、存続に自信を持ち始めている。

多田さんへの信頼は厚い。京都大学で応援団長として鳴らした多田さんは池谷集落でも応援団長的存在。真摯に対応しながら、むしろ裏方に徹しているようでもある。総務省の地域力創造アドバイザー、ビジネスモデル・デザイナー(R)、コンサルタントとしての依頼が増えてきたが、池谷へ戻って家族と過ごし、棚田で農耕をする日々を何よりも大切にしているように感じた。

多田さん一家の住まいは「やまのまなびや」近くの中古住宅で、納屋には住民から寄せられた農機具がいっぱい。移住してきたとき2歳だった長男の和正君は小学5年になり、田植えイベントでは参加した子供たちを誘導したり、田植えも大人並みに行っていた。池谷で生まれた二男の幸弘君(小1)は骨折のため会えなかったが、三男の直史ちゃん(2歳)は、一人で田圃の土手に立って皆の作業をじっと見ていた。長時間愚痴一つ言わず凛とした感じで立っている。その姿をみて、きっと将来は植物学者か動物学者になるに違いないと思った。

多忙な朋孔さんに代わって事務局の仕事を担っているのが美紀さん。「山清水米」はネット販売も行われるようになったため、その注文と発送が美紀さんの仕事。子供たちの世話や地域のお母さんたちと食事の準備等、からだが幾つあっても足りないようだ。

地元の食材たっぷり—夕飯・交流会

午後5時半から池谷集会所では夕飯・交流会。夕飯の準備のため厨房では午前中から曽根イミ子さんと庭野ヒサさん、多田美紀さん、福嶋美佳さんが地元の食材で数々の手料理作りに追われた。庭先では、多田朋孔さんが山清水米を薪で炊いている。ゼンマイやフキの煮物、天ぷら、野菜サラダ等が並び、参加者が集合したところで、山本代表が挨拶し、池谷集落の存亡の危機から現在に至る経過を話した。最後に「平成21年には池谷集落の人口は6軒13人、高齢化率62%でしたが、いまは11軒25人、高齢化率40%になっています。凄いことです」と語り、拍手を浴びた。

次いで多田さんがスクリーンに映しながら、池谷ビジョンの経過と今後を説明した。説明会の後は、何時も集落で歌い継がれてきた「天神囃子」を唄って宴会に移行した。

我々もお暇をして中条地区の民宿「萬代」へ。萬代は、十日町市が開催する大地の芸術祭等のガイドをしているため、その日も「笹山じょうもん市」にきた学生やグループが宿泊していた。翌朝店主の曽根茂さんは皆を中条城跡へ案内し、眼下に広がる十日町大地の素晴らしさを語った。曽根さんは実は子供時代まで池谷に住んでいたと言う。「家は大規模農家でしたが、私の兄が早くに亡くなり、父は農業後継者を失ったショックで、集落を出たいと言い出した。私が中学生、もう40年以上前の話です。会社勤めをしながら農業もしていたが、ここらも耕作放棄する田圃が増えてきたため私が借りて、いま1町歩を耕作しています」という。池谷集落に若者たちが移住してきたことは知っており、「山菜や野菜、棚田米を買える店が欲しい」と語っていた。

そのあとNPO法人「笹山縄文の里」が開催する「じょうもん市」で働く福嶋美佳さんを訪ね、再び池谷地区に戻り、田植えを終えた水田やブナの森を散策した。小学校では運動会もあり、集落には住民の姿はなかったが、穏やかでアットホームな雰囲気に溢れている。入山集落では家は消えたが、水田の多くは耕作されている。

慣れてくると森の中の道は走りやすく明るくて快適だ。次は豪雪の頃にぜひ訪ねたいと思う。

文／浅井登美子　写真／満田美樹

▲「笹山じょうもん市」で係員として働く福嶋美佳さん。麻の衣装がよく似合う

◀中学生の頃まで池谷に住んでいたと語る民宿「萬代」の曽根さん。山合いの休耕田を積極的に耕作している

●NPO法人地域おこし　☎025-761-7009　http://www/iketani.org

U・Iターンして地域を元気に

山の暮らしを子供たちへ、未来へ

［日本上流文化圏研究所］

山梨県早川町（はやかわちょう）

川の上流域には天から授かる水を守り、下流へ送るという役割がある。その大きな使命とそこに連なる山暮らしの尊さを、私たちは忘れがちだ。繁栄を続ける都市部の下流域と水源の森は、今日もいのちの水で繋がっている。山梨県早川町の「日本上流文化圏研究所」は、山の暮らしを独自の視点で捉え、多彩な活動を続ける頼もしきNPO法人。月一回開催する「子どもクラブ」のイベントに合わせて出かけた。

▶長谷川空五さんから釣竿づくりのコツを聞く親子

県下一の山林の町

日本上流文化圏研究所――その名を聞いた時のかすかな違和感が胸に残ったまま、取材のクルマは山梨県早川町へと向かった。南アルプス南麓に広がる町は、森の緑が景色のすべてと思われるほど、山の連なりが果てしなく続く。

身延山信仰でも知られた町の歴史は古く、中央を流れる早川の流域には昔から幾つかの集落が形成されてきた。町の中心部にほど近い赤沢宿には、今も江戸時代の面影を残した講中宿が点在し、リニューアルされた宿はゲストハウスとして外国人観光客の間でも人気を呼んでいる。

その96%が山林という町の総面積は３７０㎢と県内の町として県下一の広さを誇るが、およそ１１００人までに減少した町の人口を考えると、過疎化の深刻さは半端なものではないだろう。

この日めざす日本上流文化圏研究所は、役場から続く急勾配の坂道を登りきった先、交流促進センター内にあった。早川町の総合計画の一環として設立され、自立活性化推進交付金などの助成金を基に町からの委託を受けて事業を展開している。

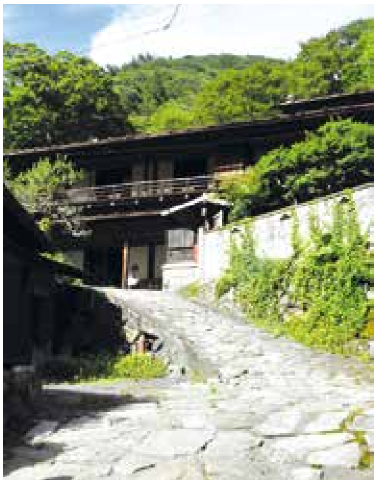
現在は80名の正会員と１６０名の賛助会員がサポートするＮＰＯ法人で、理事長、地域おこし協力隊、臨時職員を含めて9名のスタッフが働いている。

上流文化圏とは、川の上流域に育まれてきた山村文化を守り継いでいこうという人々の暮らす場所であった。上流文化圏研究所（以下「上流研」）は平成8年に活動を開始した。恵みの水を蓄え、下流に送ろうという使命を持って、山を守ってきた先人たちの暮らしに学

▲〝上流研〟のある交流促進センター

▲その日は年１回の上流研総会が開催された

▼身延山詣を今に残す赤沢宿



び、自然の中でより人間らしく生きていこうという創意のもとに数々の活動を行っている。

◀〝上流研〟スタッフ・上原佑貴さん(左)と中川裕幾さん

学生時代のボランティアが縁

上流研は、スタート時には当時の人口2000人を視野に、学生ボランティアなどの協力を得て「2000人のホームページ」づくりを行った。他にも地域資源を掘り起こそうと伝統行事、古文書などを学ぶ「町民塾」も開かれてきた。

研究員のひとり上原佑貴さん(39)は、早稲田大学建築科の学生だった頃、町のホームページ作りやイベントボランティアで早川町を何度となく訪ねていた。そんな縁で、昨年春に家族と共に愛媛県から移住してきた。

インド生活の経験もある上原さんは、元々は東京の出身。妻の若菜さんも神奈川県の出身で、3人の子供たちと8年間を愛媛県で農業者として暮らした。そしてある時、子育てするには早川町が最適ではないかと、かつて通ったこの町への想いが募り、移住を決意したと言う。

「ホームページづくりでは町民の方々から沢山の話を聞きました。集落には山暮らしの知恵や工夫、高度な技術が山ほどあり、地域文化の宝庫のようでした」と上原さん。ホームページは単なる町民紹介の内容を超え、貴重な人材データ、山村文化保存のための歴史資料として活用されるに十分なものだった。高齢化の進む中、暮らしの価値を再認識する気運が生まれ、委縮する一方だった集落は少しずつ元気を取り戻していった。

教育費無償化で人気の山村留学

上流研には「山の暮らしを守る」という大きな使命と共に、それを実現するための活動の柱というものがある。それは、山の暮らしの価値を伝える、担い手を育てる、課題を解決するという3点だ。

なかでも高齢化で人口の減っていく集落の維持は大きな課題である。早川町は、教育費の無償化や学校給食費の無料化を掲げ、山村留学制度を推進している。上流研でも、移住・定住支援事業の一環として、町と連携して山村留学制度の推進に携わっている。

市川仁美さん・歩夢(あゆむ)君親子は今年4月に東京品川から移住。7歳の歩夢君は山村留学で早川北小学校に通い、母親の仁美さんは地域おこし協力隊員として、南アルプスプラザのキッチンで働いている。

広々とした平屋建ての住まいは山村留学専用住宅。毎朝美しい山並みを見渡せ、清々しい風が吹き抜ける暮らしは、仁美さん親子をすっかり魅了したようだ。2万3000円の家賃も嬉しい。

上流研勤務の植野史子さんも13歳の朔君と昨年4月に神奈川県から移り住んできた。「子供が中学に入るタイミングだったので、それを機に移りました。仕事で遅くなると、地元のご近所さんが子供に夕食を食べさせてくれるんです。家族のような人間関係は都市にはないものでした」と史子さん。子供が中学を卒業後も狩猟の免許を取って、ずっとこの町に住み続けたいと意欲的だ。

現在早川町には小学生14名、中学生12名が山村留学している。その人気の秘密は、教育費の無償化などの経済的支援だけではないようだ。早川北小学校を例にとると、まずは少人数クラスを逆手に取った自由な授業。異年齢の集団だからこそ学べる社会性や、どんどん発言させる自主性、地域と一体になったイベントなどが、オープンスペースの広々とした教室で繰り広げられる。子供でなくてもワクワクするような、学びの空間だ。

地元育ちの望月陽平君(11)は、「小学1、2年とずっと一人だったから、山村留学の子を迎えるのはすご〜く嬉しいです」と素直で可愛い発言を返してきた。

「早川町は町と教育委員会と保護者の集まり『北っ子応援団』、そして移住者応援の上流研、これらの連携が素晴らしいのだと思いますよ」と、教育委員会の望月一彦さんはこの良

▶移住してきた市川さん親子と上原さん親子。子供同士が大の仲良し

▶雨が降る早川町

きチームプレーを絶賛する。

民家プロジェクトは、空き家の片付けから

上流研ではネットや紙媒体とさまざまなツールを使って、山暮らしのアピールと移住促進の情報発信を行ってきた。民家プロジェクトはその活動の一部で、空き家となった民家は集落を次世代に繋いでいく上での大切な地域資源と位置づける。空き家物件は移住促進の大きなキーポイントだが、そこで問題になるのが元家主によって放置された荷物の片付けである。上流研ではボランティアを募り、民家プロジェクトツアーとして、建築家が改装可能かチェックした物件で状態のよかったものについて片付け作業を行っている。平成29年度には3回、今年度はすでに1回行った。住民の参加もあり、集落とリアルに触れ合えるこうした経験が地域への関心や移住に繋がることになると、上流研は今後もツアーを継続していく予定だ。

空五さんに教わる釣竿つくり

取材に伺った日は、子供たちにとっての大きな楽しみ、「子どもクラブ」の活動日だった。前日降り続いた雨が上がって絶好の行楽日和である。この日は森林組合に45年勤めた長谷川空五さん(74)が先生になっての釣竿づくりで、上流研の主力メンバー中川裕幾さん(33)が、全体をフォローする進行役責任者。

「子どもクラブは地域への愛着や誇りを育む場として設けられた活動ですが、一般のサマーキャンプなどの企画やサポートも関連事業として行っています」と中川さん。釣竿づくりの材料調達で入った竹林のあちこちから「なかちゃーん」と声がかかる。子供たちからは兄貴のように慕われている中川さんなのだ。

そして山遊び、川遊びの達人、長谷川空五さんを見上げる子供たちの目は真剣そのもの。竹の選び方、枝の払い方などを見逃さずにじっと見ている。

「昔はね、夏にヤマメを釣るために、川の石を起こしてカジカの卵を捕るのさ。それに塩をまぶして、干して、真綿に包んで夏まで待つ。それが子供の大事な遊びだったんだねェ」

空五さんのそんな話を聞きながら釣竿は完成し、一行は近くの保川（ほがわ）へ移動した。

釣竿が躍る河原にはいつまでも子供たちの歓声が響いた。

文／片桐淑子　写真／満田美樹

▲保川にかかる橋で

▲「子どもクラブ」の開催に向けて会場へ急ぐ中川さんと子供たち

▲でかいヤマメが釣れたぞ!!
▼子供たちはみんな釣りのベテランだ

▲竹薮に入って、竿に適した竹を探す
▶釣竿の作り方を教える長谷川空五さん
▼親たちが用意した豪華な昼食。いい匂いに「腹減った!」と子供たち

▼「子どもクラブ」が使っている中ノ島の拠点

▲幸田さん一家

U・Iターンして地域を元気に

自給自足・循環型の暮らしを提案する「いちまいのおさら」

鳥取県三朝町

10年前に三朝町に移住し、自給自足の生活を続けている幸田直人さん。米・野菜の栽培はもちろん、家も自分で建て、自家発電システムやコンポストトイレまで自分で設置、〝食べること・暮らすことを楽しむ〟をテーマにした活動「いちまいのおさら」を展開している。格差や競争を生み出す大量消費型の社会ではなく、無理なく楽しみながら、持続可能な暮らし、働き方ができることを子どもたちに伝えたいと話す幸田さん。その暮らしぶりを見学させてもらった。

暮らしのインフラを自分の手で整備

ラドン泉で有名な鳥取県の三朝温泉。風格ある老舗旅館が建ち並ぶ温泉街から、車で5分ほどのところに幸田直人さんが主宰する「いちまいのおさら」はあった。

道路から少し下がったところにあるご自宅は、築60年の古民家とカフェ、ツリーハウス、鶏小屋などが、山に抱かれて建ち、まるで隠れ里のような雰囲気だ。3歳の長男・健一くんとともに出迎えてくれた幸田さんが自宅を見下ろしながら言う。

「母屋は10年近く放置されていたので、家の中も庭も荒れ放題でしたが、自分の手で改築。カフェも構造部分は大工さんに任せましたが、内装は自分でやりました」

トイレや生活排水は敷地内に循環する設備を、井戸には電気ポンプを付け、洗濯と洗い物の水を自給。電気も自家発電システムを組んで、約8割を自給しているという。さらに、冬場の暖房は薪ストーブを使い、料理に使う熱源も6割は薪(4割がガス)を使用している。もちろん〝食〟の自給率も高い。田んぼが2反と畑が1・5反あり米の自給率はほぼ100%。それに鶏50羽を飼っている。

▶上/「いちまいのおさら」全景
下/カフェ入口とベランダ
◀築60年の古民家を改修

「大災害が起きてライフラインが数カ月寸断されても、我が家では普段の暮らしを続けることができますよ」

と幸田さん。それにしても、なぜこれほど徹底した自給自足生活を選んだのか。彼の経歴を辿ってみよう。幸田さんは鳥取県北栄町の出身。岩手大学農学部在学中に、葛巻町のエコスクール「森と風のがっこう」に出会ってパーマカルチャー（農を軸とした持続可能なライフスタイル）に関心をもった。人が生活する中で出る排泄物や生活排水の処理を人任せにするのではなく、自分で処理し、サイクルさせる循環システムも岩手で体験した。

「地域、環境、資源エネルギーなど、現代社会の問題をテーマにしながらも、伝統的な技や知恵を学び、自分で仕事をつくっていく。そんな〈自分に責任が持てる暮らし〉がしたいと考えるようになったんです」

大学卒業後、鳥取県にUターンした幸田さんは、自給自足の生活が実現できそうなこの地に古民家を借りた。

「しかし、自給自足といってもお金も必要です。そこで移住後の4年間は、三朝温泉の旅館、イタリアンや和食のお店で働きながら料理の腕を磨き、調理師の免許を取得しました。お金が必要になった時に稼げるように、技術習得とネットワークを広げることが大事ですね」

日々の暮らしの当たり前さを見直す

平成27年春、自宅敷地内に「暮らしの見えるカフェ　いちまいのおさら」を開店した。このカフェの最大の特徴は、庭の野菜を収穫したり、平飼い鶏にエサをやったり――まさに、自給自足の暮らしの一端を体験できるという点にある。

幸田さんが厨房に立ち、ランチを用意してくれた。手際よく手打ち生パスタをつくる。自家製の燻製ハムとサラミ、猪肉でつくったベーコンもある。ちなみに幸田さんは狩猟免許を持っており猪も自分で捕獲する。新鮮な野菜・ハーブを使ったサラダと産みたての卵の目玉焼きを添えて、目にも鮮やかな昼食の完成だ。

明るい日差しが降り注ぐベランダ席でランチをいただきながら、話の続きをする。私も自給自足生活には関心があるが、「自分には到底無理」だと告白すると、

「最初から『無理！』と思ったらもう先に進めない。ゼロか100ではなく、グループでやってもいいと思うんですよ。畑仕事でも、味噌づくりでもみんなで楽しみながら、無理なくやっていけばいい」

幸田さんが日々大切にしていることを教えてくれた。「食べること、暮らすことを楽しむ」「好きなことを仕事にする。収入を増やすより、支出を減らす」「無理なく、楽しみながら、きちんと稼ぐ。でないと続かない」「ある物を活かす〜買う・作るよりも、ひろう・もらう〜」「どこでも、お金に頼らなくても、生き抜く力を身につける」「きちんと続く、未来に引き渡す価値のある知恵・技術を模索、暮らしで実践しながら、提案する」

大量生産・大量消費・大量廃棄の社会は、資源を枯渇させ、ゴミを増やし、環境を破壊する。今の日本は物や情報

◀猪肉のベーコンが入ったカフェで人気のランチ

▲平飼い鶏の卵を収穫

◀たんぼり村まつりの「五右衛門風呂体験」

▲子どもの遊具も手づくり

で溢れているが、それは本当に自分にとって必要なものなのか？「当たり前になっている自分の暮らしを見なおしてほしい」と幸田さんは言う。
「僕は、子どもたちにも周りの人たちにも、無理なく楽しみながら、持続可能な暮らし、働き方ができることを伝えたい。そのために今、母屋の隣に、暮らしを体験してもらう民宿を準備中です。来年開校予定のまなびやの拠点にして、まずは生きる上で基本になる米と家づくりを伝えたいと考えています」

持続可能なコミュニティを目指して

幸田さんは平成26年から鳥取県佐治町の山奥で、年に3日間だけの滞在型コミュニティイベント「たんぽり村まつり」を地元の人達と開村している。たんぽりとは、川を掘って理想の住み処を自分でつくるイワナのことで、自分たちの手で〝理想の暮らしと地域〟を目指すまつりであることからこう名付けた。
開村の経緯を幸田さんにうかがうと、
「自給自足の生活を続けるうち、自分の暮らしは地域の人たちの助けなしには（一家族だけでは）成り立たないことを実感しました。持続可能な暮らしには、持続可能な地域が必要です。そんな地域づくりができないかと考えていたら、佐治町の人たちと出会ったのです」
一方、佐治町の人たちは、地域の過疎化・高齢化に危機感を持ち、解決の道を模索していた。そこで幸田さんが中心となり、地元住民や地域おこし協力隊、自治体、民間企業の人たちとともに理想のコミュニティ「たんぽり村」を開村することにしたのだとか。

▲たんぽり村まつり

▲発電の仕組みを学ぶワークショップ

▲たんぽり村まつり

まつりでは、地元集落を歩くツアーや塩づくり、太陽光による自家発電、地域通貨、薪料理、五右衛門風呂など、自給自足の暮らしの心地よさや楽しさを体験することができる。若い世帯を中心に、３日間で６００人ぐらいが集まり、熱気に溢れるという。
最後に、幸田さんに過疎地域の現状をどう捉えているか聞いてみた。
「僕が暮らす集落は今、人口がおよそ１５０人で、年に5％近く減少しています。しかも集落を維持しているのは60～70歳代の人。その子ども世代は集落に住んではいても、ほとんどが町外に働きに出ているため、地域のことを知らない。そんな若者がやがて地域の中核になるわけです」
この現状はおそらく日本中の多くの過疎地域にもいえることだろう。打開策として幸田さんは次のような提案をする。
「若者に役職無しで役員会に参加してもらい、まずは集落の現状を知ってもらう。そして若者が発言しやすい場を作り、彼らの声に耳を傾け、年配者と若者と一緒になって未来を考えられたらいいですね」
考えてみれば、昔の人はみな自給自足、持続可能なコミュニティを実践してきたといえる。そして過疎地域と呼ばれる地域には、今もそういう昔ながらの暮らしが残っているところが多い。
「都会の高齢者に比べ、田舎の高齢者は最後まで農業をして（働いて）いるから元気です。今はお金さえ出せば、何でもやってもらえる時代ですが、衣食住、暮らしにまつわる仕事を自分ですることは、とても健全なことだと思いませんか。子どもも若者も高齢者も、いろんな世代で助け合える自給自足型の村ができたらいいなと思いますね」
取材／小田礼子

●「いちまいのおさら」幸田直人　☎090-7997-3321
Kouta.naoto@gmail.com
※カフェ・民宿を営業中。フェイスブックもある

▲唐桑の港に勢揃いした8人の「ペンターン女子」の皆さん。左から4人目が根岸えまさん（1名は撮影日に不在で参加できず）

Iターン女子
地域からの報告

愛する唐桑の、明日への応援団
「ペンターン女子」

根岸えま

宮城県気仙沼市唐桑町

東北を代表する漁業の町、気仙沼・唐桑は東日本大震災で多大な被害を受けた。学生ボランティアで訪れた女子大生たちは、家も船も流されながら頑張っている漁師さんに出逢い「価値観ががらりと変わる」ような衝撃を受け、大学を卒業すると唐桑へ移住した。いま9名の若い女性が移住してきている。「ペンターン女子」のリーダーである根岸えまさんに執筆していただいた。

こんにちは。

わたしたちは「ペンターン女子」です。ペンターン女子とは、「Peninsula（半島）」に「ターン（移住）」した女子という造語で、4年前、わたしたちが唐桑半島に移住したときにみんなでつくった言葉です。「IターンやUターンって最近言うけど、私たちは半島移住で〝ペンターン〟だね！」

そんなわたしたちペンターン女子は出身もばらばら。みんなとの出会いは気仙沼・唐桑です。山口、兵庫、富山、福井、岐阜、東京、神奈川、仙台。生まれは違うし、大学も違います。ただみんなが共通しているのは、「気仙沼・唐桑が好き」ということ。そして「ここで生きていきたい」と思っていることです。

「かっこいい大人がいた」

「どうして移住したの？」そう聞かれることもたくさんあります。わたしはひとことでいうと、「かっこいい大人たちがいたから」です。このかっこいい大人たちと仕事したい。一緒にこのまちの将来をつくっていきたい。そう思えた出会いがあったのでした。

東日本大震災が起きるまで、わたしは普通の大学生でした。大学の講義を受けて、バイトして、友達と朝まで飲んで。そんな生活にどこか違和感を感じていたとき、震災が起こりました。だけど震災が起こっても、そのと

▶上/牡蠣の養殖棚が並ぶ静かな入江
下/緑の美しい丘陵地、唐桑町

き「日本でなにか大変なことが起きている」と思ったものの、わたしはボランティアにいこう！とはなりませんでした。
　だけど、メディアの報道を見るたび「自分の目で〝被災地〟を見てみたい」「まちがひとつなくなるってどんな状態なんだろう」。そんな想い、好奇心で、大学2年生のとき、学生ボランティアに参加したのです。その派遣先がたまたま気仙沼でした。
　そこではいろいろなものを見ました。ひしゃげた橋やぺしゃんこになった車。打ち上げられた大きな船。今まで見たことのなかった光景で、360度まちが灰色でした。
　そして、このまちで、そこに住んでいた人たちに、わたしはどんな言葉をかけたらいいのか、わからないままそこに立っていました。
　当時の宿泊場所は、通称「つなかん」。被災した漁師さんのおうちをボランティアの宿泊場所として借りていました。「つなかん」に到着すると、もともとそこに住んでいた漁師さんとその奥さんが出てきて、「みんなー！　ようこそ！　よくきてくれたね～！　ありがと～う！」と底抜けの明るさで歓迎してくれました。
　その漁師さん一家は、津波で養殖のいかだは全て流され、自宅も波がかぶり、なにも残っていない状況で、なんてこの人は元気なんだ…。そして続けて「明日もボランティアがんばってねー！」
　わたしが応援にきたはずなのに。わたしたちが元気をもらって、ボランティアが応援されたのです。
　自然からたくさんの恵みを受け、海とともに暮らしてきた人たち。自然の猛威をわかった上で、それでも海と向き合う覚悟。またマイナスから始めようとする前向きさ。唐桑に暮らす人たちには〝生きるつよさ〟、どん底から這い上がる人間のつよさがありました。
　そして、もう1人の漁師さんとの出会い。それが今のわたしがここにいる原点です。
　その漁師さんは、地震が起きたとき、自分の船を停めている漁港から車で30分程度のところにいました。地震が起きると漁師さんたちは決まって、船を沖に出します。それが「沖出し」といって、津波がまだ大きくないうちに沖に船を逃すのです。その漁師さんも揺れた瞬間に、「沖出ししなければ」と思い、急いで自分の船が停めてある漁港に戻ったものの、そのときはすでに地震発生から20分が経過。普段たくさんの船が停まっている漁港の船はみな沖出しをしたあとだったのです。
　それでも彼は船を出すことを決めます。でももう津波はすぐそこまで迫っています。それでも船を沖に出したのです。
　船か命か。なんとか津波を乗り越え、船も命も助かりましたが、そこに迷いは一ミリもなかったそうです。そんな漁師さんの生き様を聞きながら、目の前に山盛りの刺身が並べられ、「俺が獲ってきた魚だから残さず食えよ」そう言われたのです。
　東京で生まれ育ったわたしは、それまで漁師さんに会ったことは一度もなく、スーパーで並ぶ刺身はある意味〝モノ〟でしかなかったのです。だけどそのときに初めて「魚は漁師さんたちが命懸けで獲ってきているものだ」ということを認識しました。
　そしてさらにその漁師さんが語ったのは、

▲若手の漁師村上貴哉さんと語る根岸えまさん

▲シェアハウスの隣に住む男庯（おのとら）さん夫妻を訪ねて

▶唐桑御殿を背景にペンターン女子のみなさん

「俺がこのまちの漁業をなんとかしないといけねえ」といった圧倒的な漁業への使命感、まちへの使命感でした。それは、自分の利益とかではない、純粋なまちへのきもち、漁業への想いでした。

自分の仕事を誇りに思っていること。自分のまちへの圧倒的使命感。そんなかっこいい大人との出会いで、わたしは価値観ががらっと変わりました。こんな世界があることを、初めて知りました。

そして、大学4年のとき、就職するかどうか、とても迷いました。まわりの大人に相談すると、ほとんどの人に卒業してすぐに気仙沼・唐桑にいくことを反対されました。「いま行ってもなんの戦力にもならない」「東京の企業で2~3年働いて、スキルやノウハウ、ネットワークをつくってから行った方がいい」

たくさんの大人に反対されましたが、それでも最後には、どちらが正しいかではなく、どちらが自分の心がワクワクするか、どちらが自分らしくいられるのか、イキイキと生きられるのか、を考え、気仙沼・唐桑で出会ったあのかっこいい大人たちと一緒に働くことを選んだのです。

いまやっていること

そうして大学卒業をした平成27年、一般社団法人「まるオフィス」を大学時代から一緒に活動していた仲間たちと立ち上げました。今は「種まき」「マッチング」「応援」の3つの軸で事業を行っています。

1つめの「種まき」は主に地元中高生向けに行っている漁師体験や農家体験です。気仙沼には大学がないため、高校卒業時に9割の人が進学・就職でまちを離れます。そして「地元にはなにもない」「仕事がない」といって、そのまま帰ってこない、という日本の各地域同様の課題があります。しかし、その本質は、実は「地元を知らない」のではないか、と思うのです。18歳までに学校と家庭だけではないたくさんの地域の大人たちと関わり、地域での働きがい暮らしがいを知ってから市外へ出て行ってほしい、そう思っています。

2つめの「マッチング」は、気仙沼市の移住定住支援センターの運営をしています。地元出身で首都圏に住んでいる方々、そしてわたしたちペンターン女子のように「移住したい!」と思った方に仕事や空き家、そして暮らしをよりゆたかにしてくれる地元サポーターたちの紹介をしています。他にもお試し移住として大学生向けインターンシップや東京での交流会など、地域の外にいる人と、地域

▼若林詩織さん。神奈川県出身、2018年移住。高校の先生を辞めて移住し、現在は唐桑公民館の嘱託職員

▼織笠有加里さん。仙台市出身、2017年移住。気仙沼地域戦略で地域おこし協力隊として観光DMOを担う

▼稲葉美羽さん。静岡県出身、2017年に1年間の休学・移住を経て、現在大学4年生。2019年春から移住予定

▼根岸えまさん。東京都出身、2014年移住。ペンターン女子の代表で、(一社)まるオフィスのローカルマネージャー

▼小町香織さん。富山県出身、2015年移住。市立図書館嘱託員として働きながら、休日は若者の人材育成プログラムに関わる

▼佐々木美穂さん。兵庫県出身、2015年移住。民間企業で林業の担い手育成プログラムなどを担当

▼西川緑さん。山口県出身、2018年移住。現在大学4年生だが、すでに大学の単位を取り終わったため、移住して唐桑町まちづくり協議会で働く

▼男庨祐生さん。奈良県出身、2014年移住。2016年に地元男性と結婚、この春子どもが生まれた

◀シェアハウス（唐桑御殿）

の中にいる人をつなぐ事業です。

３つめの「応援」では、地域に暮らす20～30代の「やりたい！」を応援するプログラムを実施。地域で活躍する経営者の話を聞く場や、半年間自分のやりたい！を具体化する実践塾など、若者のチャレンジを応援する環境づくりをしています。

自然を敬い地域を愛する漁師さんや農家さん、気骨のある経営者、震災後に移住してきたたくさんのチャレンジャーたち。

気仙沼・唐桑は、わたしたちからみると「東京にないものがたくさんある」のです。

野菜や鮮魚が届けられる暮らしのこと

ペンターン女子のわたしたちは築40年の古民家を借りてシェアハウスをしています。唐桑は、かつて遠洋マグロ漁船で栄えた港町。まちの８割の男性が遠洋マグロ船に乗り、マグロを追って世界の海に出ていたのです。そして１年間の航海が終わると大金を抱えて帰ってきて、競うようにして立派な御殿を建てました。１年間自分が留守にする間、家族を不自由にしないように。それが「唐桑御殿」と呼ばれていて、わたしたちのシェアハウスも唐桑御殿です。つまりかつての漁師の誇りなのです。

ピカピカの赤瓦、反りかえった屋根。入母屋づくりの漁師御殿。そんな唐桑御殿に、各地から移住してきた女子４人で住んでいます。

朝、近所の人が畑で採れた野菜をおすそわけしてくれたり、ウニの開口があった日は近所の漁師さんからウニが届いたり。ときにはカツオも届きます。風邪をひいたときは近所のばーちゃんがおにぎりとけんちん汁を持ってきてくれたり。本当にゆたかな暮らしです。

わたしたちペンターン女子は、みんなで地元の伝統芸能「松圃虎舞」にも参加していて、夏には地元の神社のお祭りやイベントに出ています。

朝、シェアハウスで飼っている愛犬の散歩にいくと、たくさんの知り合いに会います。「あら、えまちゃん、今日は仕事？暑いから気をつけらいんよ～」

お金をたくさん稼ぐことにゆたかさを感じる人もいますが、わたしはここでの暮らしそのものにゆたかさを感じます。地元の人たちから「心のゆたかさ」を学び、「暮らしのゆたかさ」を感じ、毎日生きています。

このまちにはなにもない!?

そう言って子どもや孫たちがまちを出て行って、まちに対して諦めを感じていたばーちゃんたちが、今度は「大学を卒業してまでこのまちに移住する子たちがいる」といって笑うのです。「あんたたちよくこんななにもないところにきたねぇ」といいながら。

このまちで、19歳のときの何も知らないわたしを受け入れ、育ててくれたこのまちの人たちに恩返しをしたいです。わたしにいろんなことを教えてくれたばーちゃんたちが、このまちで最期を迎えるときに「ああ、このまちは津波がきて、たくさんのものを失ったけど、このまちに生きてきてよかったなぁ」と笑って最期を迎えられるまちにしたいのです。

このまちにしかないものがたくさんある。わたしはこのまちにしかないゆたかさを大切にしながら、これからもここに生きていきたいです。

写真／村上昭浩

◀▲気仙沼みなとまつり「はまらいんや踊り」に仲間らと参加

※不在のため撮影できなかった女性は、矢野明日香さん。2016年移住、岐阜県出身

●ペンターン女子 http://pen-turn.com/
●(一社)まるオフィス
http://maru-office.com/
●気仙沼市移住・定住支援センター MINATO
☎0226-25-9119

▶移住・交流の拠点となる通称「ミラノシカ」

Iターン女子 地域からの報告

これからの暮らしを実験する［みらいのシカケ］

小林未歩　福岡県上毛町（こうげまち）

福岡県の東端にある人口約７７００人の上毛町では、行動力のある個性派を募集し、５家族10数人が移住してきた。自身も移住してきて交流・移住施策を担当する小林未歩さんに執筆をお願いした。

「みらいのシカケ」のはじまり

「景色、食、ひと。上毛には魅力的な〝資源〟がたくさんあるのに、それらが埋もれていること」「受け継がれず消えていくかもしれないこと」に不安を感じていた町の職員が「地域の方にもっと自分たちの資源に自信を持ってもらい、誇りを持ってもらえる術はないか」と、住みたい上毛町推進プロジェクトを掲げ、まずは、様々な事業協力者とともに、「上毛町ワーキングステイ２０１２」を企画したところから「みらいのシカケ」は始まりました。

この「ワーキングステイ」というお試し居住プログラムをケーススタディとして、平成25年には「田舎暮らし研究村構想」（※１）がスタート。上毛町初の地域おこし協力隊となる西塔大海さんが移住し、プロジェクトの運営に携わります。

上毛町有田集落にある築１００年以上の古民家を、学生や地域の人が一丸となって改修する「ＫＯＧＥデザインビルド」が始まり、26年にはプロジェクトの拠点となる「田舎暮らし研究交流サロン」が完成しました。

この研究サロンの立ち上げ作業と同時に、ネット上の拠点となる情報発信サイトを作ろう！ということでしたが、この名前（「田舎暮らし研究村構想」）だと、都市部にいる若者たちには届かない…。そこで、総合デザインを依頼していた外部プロデューサーを中心にアイデアを出し合った結果、「みらいのシカケ」というネーミングが誕生したのです。

この年に都市や地域づくり、コミュニティづくりの部門で、住みたい上毛町推進プロジェクト（＝こうげのシゴトとみらいのシカケの二本柱）は、日本デザイン振興会のグッドデザイン賞を受賞しました。

「ミラノシカ」を中心に生まれる好循環

平成27年には２人目の協力隊となる若岡拓也さんが着任し、上毛町の空き家バンク情報サイト「しばいぬ物件案内」がスタート。翌28年に３人目の協力隊として私・小林が着任します。この年から、若岡さんの特技を生かして上毛町の豊かな自然の中を走る「修

［小林未歩さんのプロフィール］
1982年生まれ、東京都出身のイラストレーター／グラフィックデザイナー。2013年に沖縄へ移住し、イラスト・デザインの仕事のかたわら商店街の中で場づくりに関わるようになる。平成27年に上毛町のワーキングステイに参加したのをきっかけに、28年、「みらいのシカケ」に携わる地域おこし協力隊として上毛町に移住した。

▶研究サロンがある有田集落にて秋の稲刈り風景（絵：小林未歩）

◀ワーキングステイ参加者のほとんどがリピーターに

験道トレイルランニング」が始まりました。その後、研究サロンに集まる人たちが普段どんな本を読んでいるのかがわかるようにと、訪れる人の寄贈本によって育つ私設図書館「まちライブラリー」を導入し、本を媒介したコミュニティも生まれています。

みらいのシカケの中でも、特にワーキングステイは交流人口を増やすことに大きく寄与してきました。一般的なトライアルステイよりも長期間滞在することで地域とのつながりも深くなり、参加者のほとんどがその後何度も上毛町に訪れています。「働く」と「暮らす」が両方できることで、よりリアルな田舎暮らしを体験することができるため、中には実際に移住したり、結婚に至ったメンバーもいます。

研究サロンはみらいのシカケの愛称「ミラノシカ」と呼ばれるようになり、山の奥にある施設にも関わらず年間延べ1200人ほどが訪れるほどになりました。そこに集まる人たちの人柄や個性、持っている多種多様なスキル、そして土地の魅力やみらいのシカケが描く田舎暮らしの可能性に魅かれて、町のファンが生まれていくのです。

「田舎暮らし研究村構想」の4本柱

・お試し居住の拠点となる「田舎暮らし研究交流サロン」の開設と運営

見晴らしの良い山の中腹に位置する、築100年以上の古民家を学生と地域の人たちの手で改修(「KOGEデザインビルド」)。研究サロンは、交流・移住・定住促進のためのシンボル。

移住希望者や交流体験参加者などが最初に訪れる〝入口〟としてスタッフ(研究員)が、地域への橋渡し(紹介)を行います。誰もが、いつでも好きなときに交流や文化体験ができる場所としても広く一般に開放。

・ワーキングステイ「田舎の新しいワークスタイルの検証」

お試しで上毛町の田舎に住んでみませんかという企画です。

コンセプトは普段の自分の仕事を田舎に持ち込んで、働きながら暮らすこと。

希望者は「1ヶ月間 家賃500円」で物件をかりて、地域住民やさまざまなまちづくり活動に関わることができます。

・こうげの寺子屋／弟子入りプロジェクト

都市に住む人たち(弟子)と、上毛町の農業者や加工グループ(師匠)をマッチング。町を訪れる方が、地域の皆さんと活発に交流し、互いに助け合い、刺激し合うきっかけをつくることを短期目標、〝笑顔の好循環〟の仕組みをつくることを将来目標としています。

※1

▲田舎暮らし研究村構想図
◀上/地域の人も頻繁に訪れます
下/ミラノシカで食事を囲んだ交流会をすることも

・働き方や暮らし方の提示

「田舎に能動的な人が集まる情報発信」サイト「みらいのシカケ」の運営

構想の〝考え方〟や〝動き〟を的確に伝え、町に必要な人材を呼び込むために、奇抜で斬新なウェブサイトを構築します。移住や交流、定住施策のポータルサイト化を視野に、Ｉターン者など〝上毛町暮らし〟の実践者を中心に、全国の関心層に届くコンテンツを戦略的に発信していきます。

私が移住してきた経緯と役割

私が初めて上毛町の名前を聞いたのは、沖縄でした。出身は東京ですが、都市部での暮らしに違和感を感じるようになり、東日本大震災を機に友人の住む沖縄へ移住。沖縄では那覇市の商店街にデザイン事務所兼雑貨屋を構え、様々なイベントを企画運営する場作りにも取り組むようになりました。そこで一緒に活動していた仲間に誘われ、平成27年の秋に上毛町のワーキングステイに参加。それまで九州に行ったこともなかった私が、福岡の人も知らないような辺境の上毛町へ降り立ち、周囲を山に囲まれた尻高地区に約1週間ほど滞在します。

滞在中は、当時協力隊だった西塔さんと若岡さんにあちこち案内してもらいました。田舎らしい田舎を持たずに育った私には、地区ごとに行われる神楽や、朝起きて玄関を開けたら鹿の群れが山を駆け上る姿などは忘れがたい光景です。その間に出会った地域の方々のポテンシャルの高さも強く印象に残りましたが、なによりも「みらいのシカケ」というプロジェクトとそこに関わる人たちに魅かれ、これからの暮らし方を実験する場としての可能性を感じました。

ワーキングステイを終えて再び4月に訪問した後、新しい協力隊を募集するのでぜひ応募しませんか、と連絡をいただきました。急な話でしたが、これから先暮らす場所として沖縄以外の選択肢を試してみるにはいい時期かもしれないと思い、応募してみることに。

都会で暮らしてきた人が田舎暮らしをするには大きなハードルが幾つもあります。仕事や家、特に地方においては人間関係が重要になってくる。その点で、上毛町でのワーキングステイに参加して短期間でも地域の人と接点を持てたことが、多くのハードルを低くしてくれました。

協力隊として正式採用され、田舎暮らし研究交流サロンの常駐スタッフとして「みらいのシカケ」に携わることになります。研究サロンでの仕事は、移住定住相談の窓口としての役割と、上毛町に訪れてくれる人を増やすためのイベント企画運営、ワーキングステイを通して来訪者と地域をつなぐ橋渡しをすることなど。かつてはもてなされる側だった私が、もてなす側に変わりました。

みらいのシカケのこれから

こうして「みらいのシカケ」を通して、少しずつ移住者がやってくる町になりました。毎年、数組の移住者を受け入れています。そのほかにも、通いながら〝まちづくり〟に関わるというスタイルの方(関係人口)も増えてきました。なにより、地元の方々の前向きなパワーが、以前にもまして感じられるようになってきたと思います。

そのようなＩターン・Ｕターンや地元住民が、新しく始めた「民間のプロジェクト／事業」が、昨年ごろから、次々と芽吹き始めています。カフェ、不動産屋、餃子屋、蕎麦屋、住み開き、映画部、野草研究会、子供達のための場づくり等々。

新しい移住者を受け入れることも大切ですが、そういうお店や取り組みも積極的に応援していきたいと思います。

「みらいのシカケ」は、今では、福岡県の移住促進成功事例として紹介されることもあります。しかし、成功事例ではありません。道半ばの〝挑戦事例〟です。まだまだ、これから始まったばかりなのです。

▲地域の田植のを手伝い

●上毛町役場　☎0979-72-3111
●田舎暮らし研究交流サロン　☎0979-72-1556

気負いすぎないこと

ゆっくりと時間をかけてその土地や人たちへの愛着が育っていくと、自然と心から、ここに住むこの人たちのために「何かしたい」と思うようになります。そうなった時に初めて、課題解決のために自分の持つ知識やアイデア・経験が、その土地に合った形でどうやったら役立てられるかが見えてくる。Uターンした人や、すでにその土地と関係性ができている人はもっとスムーズにいくかもしれませんが、ふらりとやってきた移住者が、責任感や義務感だけで、永く地域に関わることは難しい。失敗しても諦めずに関わっていくには、やはり「愛着」が鍵になると思います。

上毛町の協力隊員として着任してすぐ、地域のおじさんから言われたことがずっと心に残っています。「とにかく楽しみながら、この土地で遊んでください」。色んなアイデアを試し、一緒になって遊んでくれる地域の人がいるということはとてもありがたいこと。ヒトやコトの掛け合わせで起きる化学反応は発酵にも似ていて、予想外の良い結果を生むことがあります。

「みらいのシカケ」の、どのシカケがどこでどんな風に芽を出すのかは私たちにもわかりませんが、常に遊び心を忘れずにこれからの暮らしを考え続ける人たちがいる限り、必ず面白いことが起こるだろうという期待とワクワク感が、ここにあります。

小林未歩さんのイラストによる上毛町の風景

ふるさとをリノベーション

クリエイター等が集う［オフィスキャンプ］
奥大和の里に65名が移住

奈良県東吉野村

奈良県の南東部に位置する人口約1800人の東吉野村には、文筆、デザイン、建築関係者、木工や陶芸等の職人を目指す若者等、子供を含めて65人が移住してきている。その拠点となる「オフィスキャンプ東吉野」には、今日も大阪方面からやってきた若者が集い、珈琲を味わいながら語り、パソコン等に向かって作業をする。吉野杉の産地である林業の村に若者はなぜ移住してくるのか。

歴史を刻む、森と清流の里

東吉野村へ入って目に飛び込んでくるのは、村内を滔々と流れる美しい清流と、清流に沿って街道が形成され、歴史を偲ばせる家々が建ち並んでいること。吉野杉・桧で作られた瀟洒で堅牢な家々で、石段の上にも家々が建つ。その裏手は急峻な山々で、手入れされた杉や桧の大木が天に向かって伸びている。手つかずの奥大和の自然と森人たちの暮らしにタイムスリップしたようだ。村内を蛇行しながら流れる高見川は紀ノ川の源流に当たり、鮎の宝庫として釣り人に人気だ。

東吉野村には、明治維新に夢を託した天誅組17名の義士がこの地に逃れて追討軍の銃口で散ったという歴史があり、またニホンオオカミ最期の地(明治38年)にもなっていて、天誅組に関わる寺院や墓所、ニホンオオカミの銅像等がある。

高速道路や交通網が整備されたため、大阪や京都から1時間半で来村出来るそうで、都会人には魅力ある穴場と言えそうだ。

クリエイティブ・ヴィレッジ構想

村の中心部、役場に近い場所に移住者の交流と仕事場を兼ねた「オフィスキャンプ東吉野」の建物がある。民家を改装した2階建て木造家屋で、運営管理の坂本大祐さん(41)が待っていてくれた。

元小学校校長の自宅だったそうで、10室以上ある広い民家である。この家をインテリアデザイナーでもある坂本さんが改装イメージと平面図を描き、地元の建築業者が施工した。玄関を入ると様々な資料や作品等を展示す

▲林業で栄えた頃を偲ばせる東吉野村小川の商店街

▲村の中央を流れる高見川。右手は村役場

▲右手がオフィスキャンプの建物

上/オフィスキャンプに来て仕事や打ち合わせをする人たち
左/ニホンオオカミの銅像。明治38年に捉えられた若雄のニホンオオカミの最期の地と言われ、英国から派遣された動物探検隊に8円50銭で買い取られ、ロンドン自然史博物館に保存されている。村ではオオカミに関する絵本を一般募集し、優秀作品を絵本にして出版している

るコーナーがあり、右手にはカフェ、左手には十数人が座れるケヤキの大テーブルを配したワークスペースがある。その奥に和室、裏手に広々としたキッチン、2階には和室が3室ある。玄関前上部の和室は撤去して吹き抜けにしたため、開放的な雰囲気で、しかも窓から見える石垣の緑や河川を望む風景との一体感が素晴らしい。

午後3時頃には仕事で奈良市へ出かける予定の坂本さんが、カフェのカウンターに入って、豆を挽いて美味しい珈琲を煎れてくれた。

坂本さんが東吉野村に移住してきたのは11年前。大阪を中心にフリーランスのクリエイターをしていたが、体調を崩したため両親が建てていた東吉野のアトリエに引っ越してきて、ここから各地へ出かける生活をしていた。そんな時出会ったのが、移住をテーマに村へ取材に来た奈良県移住・交流推進室長の福野博昭さんだった。以来、県の広報やデザインの仕事を頼まれて福野さんと交流するうちに、クリエイティブ・ヴィレッジ構想が出来上がったという。

この構想をまとめて福野さん、菅野大門さんと役場へ出かけ、水本村長に直談判した。「奥大和は都会人に魅力的な自然や風土がある。ここに若いクリエイターや職人を呼び込もうというプロジェクトです」と語ると、若者の移住を手がけていた村長は、即プロジェクトの実現化へ向けて動いてくれた。

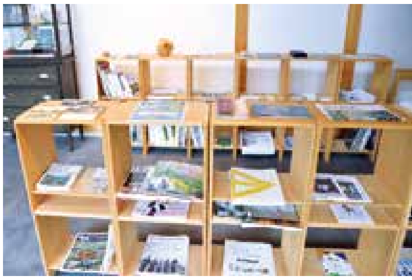
菅野さんはプロダクトデザイナーで、役場へ1歳になる長男を連れて行ったことから、「こんな赤ちゃんを連れて移住してきた若者もいるのか」と村長が感動したという。

▲珈琲を煎れてくれる坂本大祐さん

探していた民家は偶然すぐ見つかり、家主が寄贈してくれることになった。村と県が改装費の一部を助成、平成27年3月にオフィスキャンプが完成した。早速ブログ等でオフィスキャンプの設立意図と移住を呼びかけたところ、反響は大きく、一年ほどで5組10人の若者が移住してきた。坂本さんが代表になり29年11月に合同会社オフィスキャンプを設立した。社員は各地で活躍してきたクリエイターたち6名。

会社の紹介冊子には「合同会社オフィスキャンプは街から地方へ移り住んだクリエイターが集まってできた会社です。中山間地域の活動を中心として、日本全国をフィールドにし、地方から中央へ、情報や物の流れを生み出しています」と書かれている。取引先には著名な出版社や企業、自治体も名を連ねている。

その日も関西から編集者たちが訪れて打ち合わせをしていた。「役場からは管理運営費として月1万円助成してもらっていますが、ここを利用する方には入館料を一人500円いただいており、これは役場に納めています。年間30～40万円になりますね」と坂本さん。


▲様々な資料やガイド誌を展示している玄関先き

坂本さんは「僕と三番目の弟は大阪のニュータウンに暮らしていた時、祖父母の薦めで東吉野村に山村留学しました。僕が中学1年、弟が小学3年でした。釣りをしたり昆虫を追っかけたり、すごく楽しかった。それが東吉野村へ再び来る原点になっています」と言う。

さらに画家である坂本さんの父親・坂本和之氏も東吉野村にアトリエを構えることになった。「新しい時代にふさわしい新しい芸術。美術館も私たちでつくろう」と主張する和之画伯は、廃校になった学校で美術展を開催したり、民家で書画展を開いたりしている。和之画伯の自然と人間の英知を彷彿させる作品を見ると、祖父母や両親のDNAが息子の大祐さん等に受け継がれ、地域づくり等にも活かされているように見える。

大祐さんは昨年真知子さん(29)と結婚した。岡山県出身、地域問題に関心を持つ真知子さんは、忙しい大祐さんに代わってオフィスの連絡事務等を支えている。

オフィスでは大祐さんの弟・武士さんも働いていて、「村の将来についてはやや悲観的だ」と言う。「移住者が60人増えて村は賑やかになってきたが、今頑張っている高齢者たちが亡くなっていくと、地域によっては移住者たちだけの集落もできてしまう。移住した

▲1階に設けられた和室。壁の絵画は坂本さんの父・和之画伯の作品

◀右/吉野杉で作った積木。沢山の角を活かすことで、従来にない積木が楽しめる
左/珈琲には中峰瞳さん手製のクッキーや洋菓子が似合う

いと言う人はいくらもいるが、受け入れる空き家や若者を雇用する仕事場は少ない。移住者を呼ぶことで活路を見つけようとする自治体が多いが、村や県、国は早急に抜本的な対策を講じることが急務だと思います」と語っていた。

木工家具職人を継承する

総務企画課の鍵谷典秀課長の案内で、最近移住してきた二人の職人さんを訪ねた。

家具職人として東吉野村の工房へ通い続けてきた中峰渉さん(33)は、一戸建て住宅の改装を終えて、今年6月に奥さんの瞳さんと二人の子供を伴って移住してきた。

作業場は道路沿いに建つ一見古めかしい工場だが、シャッターを開けると天井が高い広々とした明るい工房が現れた。加工を待つ木材が沢山置かれ、工作に必要な機器が殆ど完備している。この工房を提供してくれたのは村の木工職人・桝本圭一さん(70)。自らも時々使用するが、ここを木工職人をめざす若者たちの拠点にしてほしいと、中峰さんに木工職人としての継承を託した。

中峰さんは村の特産品であるほうの葉寿司の木箱を制作中で、「小さな道の駅 ひよしのさとマルシェ」で販売されている。木箱入りの寿司とは何とも贅沢だが、木箱は物入れにも使えるため、一点ずつ丁寧に仕上げている。

近くに自宅があり、役場から注文を受けた本棚も完成していると言うので、お伺いした。

道路の上に建つ民家で、土台を除いて大幅に改装した。床は村内の木材を様々に加工して敷き詰めたフローリングで、民家に残っていた障子なども新たに仕切りに生かしている。居間のテーブルと椅子、多目的に使える飾り棚、事務用デスク等々、家具職人中峰さんのセンスと技が随所に活きている。

中峰さんは、神戸で人気の女性ファッション誌の編集をする傍ら、前職の家具製造の技術を活かしたいと時々飛騨高山の工房に通った。瞳さんと結婚してからは住まいを尼崎に移して、東吉野村の桝本工房に通い詰めた。

「2時間かけて出かけてくる生活を3～4年間続けました。大変でしたが、この村の自然と人々の温かさにふれて移住を決意しました。オフィスキャンプの坂本さんたちの励ましも支えになっています」と渉さんは言う。

瞳さんは二人の子供を育てながら、菓子やケーキ作りに精を出し、オフィスキャンプのカフェにも納めている。

中峰さんは、工房で若い職人たちと吉野杉を使ったミニ家具や木の器等を開発し、東吉野村の特産品として販売していく予定である。

▲古い民家を改装した中峰さんの新居。テーブルも椅子も手づくり

▲和洋折衷のモダンな居間。役場から依頼のブック棚もある

仏像たちを身近に— 仏像彫刻師

三尾地区の小高い場所に仏像彫刻師安本篤人さん(34)の工房があった。玄関を開けると、広い和室に安本さんが制作した数々の仏像たちが静かに座している。私たちが奈良や京都等の寺で拝観する阿弥陀菩薩、大日如来像、不動明王、聖観音、毘沙門天等が、そのままの姿(縮小サイズにして)で座している。

穏やかに笑みを湛えた阿弥陀菩薩の顔、喝を入れられそうな毘沙門天の鋭い眼、風が吹いたら揺れ動きそうな仏衣、ふっくらとした繊細な指先。間近に仏像を拝見し、これらを彫刻する若い仏師がいることに驚かされた。

安本篤人さんは、隣接する仏像彫刻工房で作業中で、仕事の手を休めて現れた。爽やかだが強い意志が感じられるハンサムな青年。

生まれは奈良県葛城市。小さい時から図画工作が好きで得意だったが、親の薦めで桃山学院大学文学部へ。大学3年の時、就職活動について考えながら東大寺で仏像を見ていた時、仏像彫刻師になろうと決意したという。

「周りには寺院が多く、小さい時から仏像に

▼丹精込めて制作した仏像の前で、安本篤人さん

▶工房では等身大の仁王像を制作中。ノミで荒削りした後、彫刻刀を駆使して木彫り、小作り等、息を詰めての緊縛した作業が続く

触れる機会が多かった。仏像は対面する人の内面を如実に映しだす鏡で、あらゆる思いを受け入れてくれる器です。人が心豊かに生きていくための必要な存在として、仏師になろうと思いました」と語る。

大学を休学して仏師のもとで内弟子として修業し、独学でも彫刻について技術を磨いていった。寺を廻って仏像たちと語り、夜半をかけて木に彫刻刀を当てる日々。指には何時もマメが絶えなかった。そんな日々を約10年おくって、自分でも満足できる会心の仏像が数十点揃ったことから、平成26年2月に仏像彫刻師として活動を開始した。個人からの受注を受ける傍ら、若手作家たちの作品展示会に参加。今年は熊本市で大々的に個展を開催した。

安本さんが東吉野村に工房を構えたのは平成28年末から。29年10月には奥さんのひとみさん(34)と1歳の長女も呼び寄せた。

ひとみさんはコミュニティナースで、高齢者や独り暮らしの人を訪問看護し、交流サロン「かめや」の活動にも当たっている。ご夫婦共に人々の精神的世界を支える貴重な仕事で、村では地域おこし協力隊として迎え入れ経済面を支えることにしている。

安本さんは工房で等身大の仁王像を制作していた。詳細に描いた下絵と見本にする写真が脇に置かれている。「気が付くと朝になっていることもありますが、無心になれる不思議な時間です」と言う。

ひとみさんに仏師であるご主人との生活について聞くと、「子供がぐずったりして精神を集中できないこともあるのではと心配することもあります。でも日常生活の雑念も仏は受け入れてくれる、それを形にしていくと主人は言ってくれます」と明るい。

山形県出身で、父親を看取った経験から、「一人ひとりに寄り添う看護師をめざす」ことを決意した。幼児を持つ母親たちとも積極的に交流、皆の人気者とか。篤人さんにとってもかけがえのないナースさんと思われる。

文／浅井登美子　写真／小林恵

▶『かめや』で会議を進行する安本ひとみさん（奥中央）

◀ひよしのさとマルシェで販売されている柚調味料セット

移住者が快適に安心して暮らせる村に（水本 実村長インタビュー）

村長に就任して1期目、2期目から若者の移住定住対策に取り組みましたが、うまく機能せず、住民から「若者定住とばかり言わんといて」と言われたほどでした。私も「働く場がないのに来てくれとは言えないな」と思ったこともありました。東吉野村は林業で栄えた村。しかしブランドの吉野杉も価格が低迷し、林業経営は厳しい状況が続いています。

平成25年10月のある日、坂本大祐君と菅野大門君に出会いました。「この村には都会にはない豊かな自然があり、ここなら住みたい人がいっぱいいますよ。その発信の協力は僕らがします」と言ってくれました。そこで提案されたのがクリエイティブ・ヴィレッジ構想で、拠点施設を開設すること。古民家を探し、坂本君がデザインし、27年3月にオフィスキャンプ東吉野がオープンしました。

坂本君らが仲間を呼び、その仲間がまた発信して、いろいろな人が来るようになった。インターネットで仕事ができるため都市で働いていたクリエイター、漫画家、デザイナー、ナース、カメラマン等が移住してきて、オフィスキャンプを拠点に仕事をする。また工房を持ちたいという彫刻家、家具職人なども東吉野村に移住してきます。村では全域に光ファイバーの整備を進め、仕事が軌道に乗るまで地域おこし協力隊員として働いてもらっている人もいます。「東吉野こども園」には今年新たに6人の幼児が入園しました。

もう一つ私が嬉しいのは、村を出て行った若者の何人かがUターンしてきたことです。他所から来た若者が村で頑張っている様子を住民が感謝・理解し始めた証しです。空き家を貸してもいいと言う人も出てきて、村では空き家バンクの推進と同時に村営住宅の増設を急いでいるところです。

仕事の創設も必要です。コンビニ機能を併せた「小さな道の駅 ひよしのさとマルシェ」を昨年12月にオープン、村内の新たな仕事場として特産品加工場を整備し、食品や柚（ゆず）製品など特産品の加工販売に力を入れています。平成24年に希望する住民に配布した柚の木が今年から実をつけるようになったので、柚製品や特産品を本格的に製造して、関西はもとより関東方面でも販売する予定です。

村民は昔から村の中央を流れる高見川の清流でアユ釣り等を楽しみ、川辺はいつも子供たちの声で賑わっていました。そんな光景を過去のものではなく、今一度取り戻したいというのが私の夢です。豊かな自然と歴史文化、人情溢れる里であることが当村の自慢です。これからは新旧村民が一丸で住みやすくて魅力ある地域づくりに一層取り組んでいきたいと思います。

▼「天誅組」の法被を着て水本実村長

ふるさとをリノベーション

山の恵みと食文化をおすそ分け

「あきた森の宅配便」

秋田県小坂町（こさかまち）

秋田は山菜の王国。その種類の豊富さと美味しさは群を抜いている。祖母や父から山菜の素晴らしさを学んできた田中奈津子さんは、都市の人などにもおすそ分けすることで、地域の活性化にもなると、会社を興した。朝“森の名人”たちが奥深い山から採取してきた高品質の山菜は、整えて手を加えてその日の午後に発送、翌日の朝には各地の注文主に届けている。

▲ネマガリダケに包丁を入れる川口キサさん

小坂町は青森県と接する県北東部にあり、西側に奥羽山脈、北東に十和田湖がある自然郷。その町の中心部にあるのが小坂鉱山の近代化産業遺産群である。19世紀初頭に発見された小坂鉱山は金銀の採掘で栄え、明治には銅や亜鉛も発掘されて大賑わいした。鉄道が敷かれ、明治38年には鉱山事務所として巨費を投じて木造3階建て洋風建造物が建築され、明治43年には鉱山で働く人の娯楽の殿堂として芝居小屋「康楽館」が落成した。戦後休館していた康楽館は修復され、日本で一番古い木造芝居小屋として常打ち芝居が行われている（国重要文化財指定）。観光客で賑わう「明治１００年通り」だが、一歩路地に入ると、野菜や果物、山菜の朝市も立ち、芝居小屋の若い役者の買物姿を見ることもある。

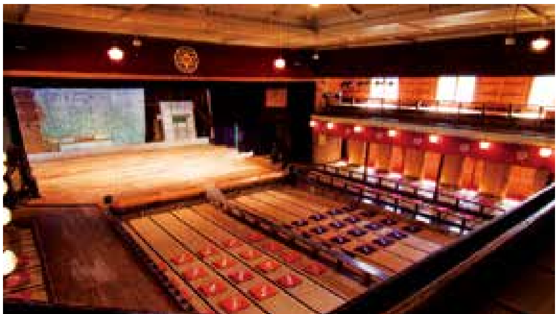
昭和45年に１３８００人だった人口は現在約５４００人になったが、小坂鉱山は自動車や産業廃棄物等の資源リサイクルを行う近代施設として変身し、各国技術者の研修機関になっている。

田中奈津子さんが営む株式会社あきた森の宅配便（以下「森の宅配便」）は康楽館から遠くない市街地にある。訪ねた6月は山菜の最盛

▲太くて柔らかいワラビ。発送に向けて整える熊谷さん

▲茹でて節等を取ったネマガリダケは直ちに缶詰用に加工。和田さんと田中奈津子さん（右）

▼小坂町の観光名所「康楽館」の桟敷



期、事務所＆作業場のある民家では、採れたての旬の山菜を発送するための分刻みの作業が行われていた。

時間との闘い、ネマガリダケの発送・加工

午後1時、大きなテーブルを配したキッチンでは、田中奈津子さん、熊谷祝子さん、和田華枝さんが、昼近くに届いたネマガリダケ（千島笹の若竹）の一部を茹でたり、ワラビを選別する等して発送の準備に追われ、隣の広い和室では川口キサさんがネマガリダケの整理作業をしている。

奈津子さんが山菜に興味を持ち、現在も何かと指導してもらっているのが母方の祖母に当たるキサさん。「山菜のことをキサばあちゃんほど知っている人はいません。いまは一緒に近くの山へ出かけてフキやワラビ、ミズなどを採ることはありますが、ここでの作業をメインにお願いしています」と奈津子さんは言う。

次々とネマガリダケを持って来て、キサさんに選別と包丁入れを頼んでいる和田さんも、「ばあちゃんはやる事が丁寧で的を得ていて、それですごく早い。とてもかないません」

採れたてのネマガリダケの発送準備を終えると、続いて茹でて缶詰に加工する作業が始まる。キサさんは使い慣れた包丁を巧みに使ってタケの先端部分を切っていく。皮の中の実を素早く取り出すために包丁を入れるが、面積と角度が大切で、先端部分は大変固くて幹を削るほどの力が必要だ。それをキサさんは慣れた手つきで素早くこなしていく。

81歳だが、現役の山菜名人。21歳で結婚したが、若い時ご主人が死去、2人の子供を女手で育て上げた。田畑を耕作しながら春夏は山菜採りをして貴重な現金収入を得たという。「もう山さ入るの辞めたの。いいタケノコ採るには1時間半から2時間もかかる山に入るからの。こうしてラクして働いて、ナッチャンからはしっかりお給金もらってる、ありがたいことです」とキサさんは仕事の手を休めることなく語る。

ネマガリダケは、皮付のまま焼いて食べるのが通好みで、程よい歯ごたえとえぐみがなく香りの良さが人気だ。しかしとても傷みやすく、そのまま数日経つと根元から腐りやすくなるため、「森の宅配便」では保存食用に缶詰に加工する。

茹で方にもコツが必要で、皮付きのタケノコを沸騰した湯に入れて、ブツブツと湯がたぎる寸前で止めて、一晩冷水に付ける。翌朝から皮むきをして、タケノコの下方部分の節は取り除いて2〜4㎝程にカットし、これらを缶詰用の缶に隙間なく並べていく。「ビン詰めは見た目もきれいで自分たちでも処方できますが、重量がかさみ割れる心配もある。そのため今はアルミ缶詰めが主体です」と和田さんは説明し、缶に入れた旬のネマガリダケを十数個持って、近くの缶詰加工

▲▶ネマガリダケは保存用に缶にセットして缶詰加工所へ運ぶ和田さん

▼やっと作業が一段落。お茶を飲んだ後は、保存加工の作業が始まる

▲発送便を入念にチェック、山菜の下処理法、調理法、保存法等の資料も添える▼3時にヤマトのクール便が受け取りに来た

所へ飛んでいった。明日には出来上がってくるという。

ネマガリダケは標高1000m前後の山に生えており、岩場も多い危険な場所で、冬眠を終えた熊とも遭遇しやすい。それだけに貴重で美味で、昔から山菜の王様として珍重されてきた。奈津子さんは、最高品質のネマガリダケを安定的に採取する名人数人と契約しており、早朝から奥山に入った名人たちは昼ごろに採取したものを「森の宅配便」へ届けに来る。注文に応じて段ボール箱に入れたネマガリダケは、「山は俺の庭、山の聖霊と化す」と自認する採取した達人たちの言葉と名前を記入、さらに下処理法、調理法、保存法等のレシピを印刷した説明書を添えて、再度チェックして封印する。午後3時ジャストにクール宅急便が現れて、大小の段ボール十数個の発送を終了した。

▶㈱あきた森の宅配便代表の田中奈津子さん▼パソコンに向かって、注文してきた人に便を発送した旨を知らせる奈津子さん

山菜で地域を元気にする

旧姓栗山奈津子さんは今年結婚して田中姓になったが、皆はナッチャンと呼んでいる。

東京農大オホーツクキャンパスを卒業して、青森市の福祉食品会社で3年間働いていたが、地元で仕事をしたいという想いが募り、平成26年にUターン、父親が趣味的に副業として営んでいた「あきた森の宅配便」を引き継いだ。

「ここらは森が豊かで深いから、山菜の宝庫です。人々は山の恵みに感謝しながら山菜をいただき、森や自然も保全してきた。この生き方を受け継ぎ、山菜を都市の人達におすそ分けすることで、地域の活性化に繋げたいと思っています」と奈津子さんは語る。

事務所兼作業場は自宅前に建つ大きな民家で、空き家となっていたため、ここを拠点に奈津子さんは山菜関連の仕事を本格的にしようと決意した。〝天然山菜採り代行サービス〟の仕事である。以前は山菜シーズンになると、山菜を採って里へ帰ってきた人から品物を購入する業者がいたと言うが、最近は高齢化が進んだり、道の駅などへ直接納めるため、代行サービスのプロフェッショナルが減ってきた。

「あきた森の宅配便」では、最高品質の山菜を旬の状態で依頼主に届けることを最優先にしているが、必要な手入れや加工を施し、さらにいくつかの山菜をセット等にして送っている。これを年間を通して行い、会社として安定的に経営していけるように努力してきた。

「秋田では山菜を一年中食べます。それは塩漬けや缶詰、瓶詰、乾燥菜として保存食にしているからで、それが旬でいただくのと違ってまた美味しい。森の宅配便では、秋から冬はこれらにキノコや蕎麦、鍋用食品を加えて、秋田の食文化として届けます」

当初はPR不足等もあって山菜を依頼してくる人が少なかったり、秋冬は扱う商品がほとんどなかったが、品質の良さやきめ細かい対応で次第に注文する人が増えてきて、殆どがリピーターになっている。

旧姓栗山奈津子さんは、平成27年に環境省グッドライフアワード最優秀賞、「森の宅配便」として総務省ふるさとづくり大賞、翌28年には内閣府男女共同参画・女性のチャレンジ賞を受賞している。

今年結婚したご主人は、地域の商工関係の仕事に従事しているそうで、二人でますます地域活性化の活動を担っていくに違いない。

文／浅井登美子　写真／小林恵

▶奈津子さんの素晴らしさは、12の山菜を、甘み、苦み、食感、希少性、手間の有無を図表化して紹介していること

●㈱あきた森の宅配便　☎・FAX.0186-29-3003
http://akita-mori.com/

ふるさとをリノベーション

有機農業を即戦力で支える
綾町農業支援センター［お助けマン部隊］

宮崎県綾町（あやちょう）

◀綾町農業支援センターで収穫する有機野菜　▲お助けマン部隊の4人

有機農業の町として全国ブランドに定着した宮崎県東諸県郡綾町で、農家の高齢化や農業の担い手不足が進行する現状を打開しようと、町とJAが連携して組織したのが即戦力となる綾町農業支援センターである。

多品目を少量でも買い取り、綾町の有機農産品という付加価値を付けて多方面に販売する。もう一つは、高齢化を迎えている農家や農繁期の人手が欲しい時に労働支援を行う「お助けマン部隊」の取り組みである。

農作業の現場を訪ねると、多様な経歴を持つ20、30歳代で働き盛りの「お助けマン」たちが、「農業は面白い」と土にまみれて収穫に勤しみ、農家と交流する有機農業の町綾町を支える新しい農業の形があった。

生産から販売まで19名が就労

小雨の中、山下明事務局次長(71)に案内してもらった農業支援センターが自主運営するビニールハウスでは、入社してまだ1年2カ月の西村航大さん(21)が、キュウリの収穫に励んでいた。

西村さんは両親が綾町で農業を営んでいる。「農業の道に自然と入りました」と頼もしい。高校卒業後、宮崎県立農業大学校で農業を学んできた彼は、「農業は現場になると、これが答というのがないので、自分のオリジナルを探して工夫を凝らしていけるのが面白いし、奥が深いですね」と、すでに一人前の農家の話しぶりだ。背よりも高く伸びた蔓の間をキュウリを見落とさないよう、収穫用コンテナを載せた車を押して注意深く進んでいく。

綾町農業支援センターには、西村さんを含めて通称「お助けマン部隊」と呼ばれる生産支援部が7人。支援

◀お助けマン部隊が管理している甘藷（かんしょ）畑

ふるさと納税で送られる綾町のマンゴー

◀綾町農業支援センターの池田信雄事務局長（左）と山下明次長

センター生産物の販売を始め、町内農家や町内加工業者の生産物の販売の他にJA出荷農産物の販売や綾町のふるさと納税返礼品の発送も引き受ける商販部には8人。その他、管理部に4人だが、「生産支援調整役かな」と、池田信雄事務局長（68）が笑う。計19人の組織だ。

有機農業の町宣言から50年 継続をめざして

終戦後に就農した農家が、高齢化を迎えリタイアする時期にきている。有機農業の町としては、農業を支える労働力を維持しなければならない。綾町行政の切実な課題なのだ。その答の一つが一般社団法人綾町農業支援センターの設立である。

「怪我や病気で農業が維持できない農家が出た時に、農業支援センターがその間の農作業を維持することで経営を継続することができる訳です。若い人が農業に取り組むことで、重労働や機械のオペレーションにも対応できる。しかし、繁忙期は良いとしても農閑期をどう維持するかという問題があります。そこで、自らが生産する。甘藷（かんしょ）、里芋、馬鈴薯、タマネギ、レタスなどを生産しながら、基本は農家の支援なんです。全国でも珍しい事業。これが事業として成り立つのかどうか。商販部を強化して生産支援と両立することでリスクカバーになります。『綾手づくりほんものセンター』など有機野菜の組織ができて30年。町が有機野菜の町宣言をしてからは50年。生産から販売まで完結することで、これまで築いてきた綾町の有機野菜の付加価値を農業支援センターの運営に活かしています」

元JA職員の池田事務局長は大組織JAの良さと限界を知った上で、綾町の農業を継続していくには農業支援センターの方向性しかないと自信に満ちた話しぶりだ。

「お助けマン部隊」で働く若者たち

現場に話を戻そう。西村さんがキュウリを収穫していた同じハウスで、お助けマン部隊の副主任を務める川元裕之さん（30）が、キュウリの蔓の吊り下げと芽掻き、それに摘葉の作業を行っていた。

川元さんのお助けマン部隊歴は5年だ。

「農作物を育てるのは子育てみたいなものです。甘やかしてもだめですし、厳しくしてもだめ。面白いです。農家へ直接労働支援に行く他に、甘藷などの苗作りをしていて、最近では焼酎の原料になる甘藷のコガネセンガンの苗をハウスで作っていました」

傍で作業をしていた松浦勇太さん（31）は宮崎市出身。以前は菓子の材料を作る会社に勤めていた。農業経験はないまま農業支援センターの社員となって5年になる。

「農家へ支援事業で行くと、農家から『ありがとう』『助かった』と声を掛けてもらえるのが励みになります。農業の経験は全然なかったから、農業支援センターでゼロから農業を学ばせてもらいました」

松浦さんは休憩時間に話題を引っ張るムードメーカーで、重労働が求められるお助けマン部隊では、松浦さんの明るさが皆の元気の源となっている。

午後は、コガネセンガンの苗を出荷したハウスの後片付けをしていた。畝を覆っていた黒いマルチシートを剥がし、残った蔓を抜き取って集める作業だ。

黙々と力を込めてマルチを引き剥がしていた内田真貴さん（31）は、宮崎大学農学部応用昆虫学科で害虫の天敵について研究をしていた。農業支援センターに就職して丸3年だが、お助けマン部隊の任務に就いたのは昨年の10月からである。

「大学で学んだ天敵の知識は実践となると、なかなか難しいですね。生産支援部にきて農作業を実践できて良かったと思っています。どんだけ手を掛けたか。それが結果として見えてくるのが農業の実感です」

お助けマン部隊の最年長者であり主任を務

▲キュウリを収穫する西村航大さん
◀ネギの苗を点検する竹内主任（右）と西郷親俊さん

◀左から、マルチを取り除く内田真貴さん、コガネセンガンの苗床を片付ける竹内一弘さん、キュウリの吊り下げと芽かきをする松浦勇太さん

める竹内一弘さん(52)は、生まれも育ちも綾町と、生粋の綾町民を自認する。

「家では繁殖牛の育成をやっています。朝は餌やりをして来っとですよ。昼間は嫁さんが居るから。農業支援センターに勤めて7年目。ここに入るまではJAで機械の修理をしていました。基本は畜産です。去年は去勢牛に70万円の値が付いたですから、畜産には楽しみがあります。それに、家では長女が嫁さんと一緒に牛飼ってくれてますから」

畜産を手伝う娘さんの話をする時、竹内さんはいかにも嬉しそうに目を細めた。

西郷親俊さん(42)は、農業支援センターで働き始めて丸2年になるが、お助けマン部隊は1年。両親が農業をしているので、いずれ独立して農業をするつもりだ。以前はシューズの製造会社に勤めていた。

「お助けマン部隊の仕事をして、農業の知識はできましたが、独立して農業をやろうと思うと難しい現実がありますね」

急ぐ作業にはお助けマンが頼り

7月中旬、西郷さんと内田さんはマンゴー農家へ剪定作業の支援に行った。3棟のハウスに約300本のマンゴーをポット栽培している大隈としのぶさん(64)の農園だ。

「マンゴーのポット栽培は、県内で10軒ほどしかやっていない、馬鹿こだわりの栽培法なんです。その分、品質が良いんです」

大隈さんは、初秋から出荷が終了する7月末までの間、農薬はまったく使用しない。この時期に発生してマンゴーに害を与えるのが害虫のスリップス(アザミウマ)だ。大隈さんは対策として、天敵生物のスワルスキーを11月に放出し駆除している。

ほとんど収穫の終わったマンゴーハウスの中は、完熟を待つマンゴーが少しだけネットに吊り下げられていた。

「他の2棟の剪定はもう終わっているので、このハウスの剪定も1日か2日のうちに終わらせないと新芽が揃わなくて、その後の作業に支障が出てくるんです。支援センターの若い人は一所懸命やってくれますよ」

普段の作業は大隈さん夫妻と妻の母親が手伝っているが、急ぐ作業で人手が欲しい時には支援センターが頼りなのだ。

マンゴーの剪定は初めてという内田さんに、ハサミの持ち方や枝のどこを切るのかを教えた大隈さん、「あなたはね、前に剪定した木も切り残しが多分にあるから、それをずっと見ていきなさい」と言うと、すっかり内田さんに任せて、自分の剪定作業に没頭していた。

「ふるさと納税」の返礼に 旬の野菜をたっぷり

畑仕事が一段落した時、事務所横の出荷場を覗くと、仕分けされた野菜を詰めたコンテナが床に並べられていた。「ふるさと納税」を納めてくれた全国の綾町ファンへ返礼品を送る準備なのだ。

「今日の返礼品は旬の野菜が15品目入ってます。月1回届けるコースもあるので、一年中、毎日25箱ずつ出荷しているのです。マンゴーが入る場合もありますよ」

山下明事務局次長が得意顔だ。

宮崎市に本社がある大手ドラッグストアやスーパーマーケットでも、綾町の有機野菜を取り入れたいとの要望を受けて、少量でも多品目の有機野菜を出荷している。「綾町の野菜には価値があるのですから、高いのは当たり前」と、スーパーの支配人が他の野菜に比べて1・5倍の値段で売ってくれているという。

「経営として成り立つかどうかが難しい」と心配しながらも、池田事務局長は「カット野菜やネギの冷凍乾燥など、良い野菜をより良い機能性野菜として付加価値を付けていく方向で、2次3次企業と組んでいければと、夢を見ているんですよ」と、将来を見据えた強かな戦略を持っている。

国の「農の雇用事業」制度を活用して来年度も2人ほど「お助けマン部隊」の雇用を考えている。いざとなったら農作業支援を頼める「お助けマン部隊」の存在が、高齢化を迎えた農家や人手不足の農家の追い詰められた気持ちを和らげ、自然の魅力と共にある農業本来の喜びを思い出させてくれることだろう。

写真・文　芥川仁

▲マンゴー農家の大隈としのぶさんから剪定の指導を受ける内田真貴さん

▼左/マンゴーの剪定をする西郷親俊さん。右/ホット栽培という特殊な方法で栽培される完熟マンゴー

●綾町農業支援センター　☎0985-77-3552

▶綾町のシンボル綾城

ふるさとをリノベーション

俺たちに明日はない!? 過疎の町で100年残る映画づくり ［田んぼdeミュージカル］

北海道むかわ町(ちょう)

「撮影中は葬式だすな」「俺たちに明日はない」「棺おけよりカンヌ」――平均年齢80歳、ユニークな合言葉を掲げて映画に情熱を燃やすグループ「田んぼdeミュージカル」。崔洋一監督に直々の指導を受け、世界的メディアからも注目を集める彼らのパワーの源は何か。北海道むかわ町穂別地区を訪ねた。

▶記念すべき第1作「田んぼdeミュージカル」のワンシーン。平均年齢73歳、振り付けは保育士さんが行った
▼同じく第1作、こちらは女性陣による台所ダンサーズ

高齢者が観光の目玉になる

穂別地区のメインストリート、メタセコイア並木にある喫茶「峰」。にこやかに客の注文を受けるマスターだが、あれ？ この彫りの深いお顔にはどこかで見覚えが……。それもそのはず、マスターは第4作目の「赤い夕陽のジュリー」に出演した花陰(はなかげ)由喜男さん、御年86歳。そう、ここ穂別は、銀幕のスターに会える町なのである。

「穂別の観光の目玉は恐竜だけど、わしら高齢者だって立派な観光資源ですよ。仲間うちではね、お互い立派な化石になろうって言ってます(笑)」

新千歳空港から車で1時間半の穂別地区は平成17年に海側の鵡川地区と合併。南北に細長いむかわ町だが、鵡川地区は水産業、穂別は林業の盛んな地区として、いずれも大河川・鵡川の恵みをいただいてきた。

穂別がもっともにぎわったのは昭和10年代。炭鉱と林業で人口も1万2000人を超えていたが、閉山後は過疎化、高齢化が進み、現在の穂別地区の人口は2688人。高齢者の割合も道内平均よりかなり高い。

そんな過疎の町で、高齢者が企画から撮影、編集、配給までを行うのが、映画制作集団「田

▶上/「本気でつくろう!」、連日、崔監督による熱い指導が行われた。下/これまでに出されたDVD

んぼdeミュージカル」なのだ。

足腰弱いけどミュージカルをやろう

ことの始まりは平成14年、地元で行われた崔洋一監督の講演会がきっかけだ。「わしらでも映画作れるべか」と尋ねた電気店の店主（のちに代表となる原田さん）に、「できるできる、台詞が覚えられなければ、ミュージカルは？」と監督から提案され、始まった。「そったらものつぐって何になる」といった議会や「第一おらたちの町には映画館もない」という人々の声は気にしなかった。

足腰弱いけど踊ってみよう、わしらと町の記録を作ろう。監督は青年団での芝居経験があり、声の大きな元工場長（79歳）、カメラマンには機械好きな80歳の農家、ヘアメイクは元美容院の経営者（78歳）、脚本は元町役場の職員（66歳）。素人による試行錯誤の毎日が始まった。

高齢者だからと言って、崔監督の映画制作指導に容赦はなかった。「人は死んでも映画は残る。プロのやり方をきちんと学べ、素人だからって手を抜くな」

そうして生まれたのが第一作の「田んぼdeミュージカル」（平成15年）だ。国の減反政策で米からメロン農家に転作していく農家の父と子の対立を描いたこの作品は、毎日新聞自治大賞奨励賞などを受賞。以降、戦後の開拓時に思いを寄せ、借り入れの済んだ田んぼで行う第2作の「田んぼdeファッションショー」（17年）、町村合併反対を叫びオートバイで爆走する第3作「いい爺いライダー」（20年、地域づくり総務大臣表彰、スポニチ文化芸術大賞グランプリなど）。第4作目は電源開発に励む村長と炭鉱の悪役たちの戦い「赤い夕陽のジュリー」（23年）、そして「ここはわしらの天国だ」が平成28年に完成した。

保健師として体調管理を中心に

中澤十四三さん（60歳）は「進行協力」として、立ち上げから中心的な役割を担ってきた。この春、保健師、ケアマネージャーとしての町の仕事を終えたばかりだ。

「私は、要するになんでも屋。町民への出演交渉から、当日のロケ弁の手配、もちろんキャストやスタッフの健康管理まで。小道具集めもすれば時代考証もやります」

十勝の本別町出身の中澤さんが保健師として穂別地区に赴任したのは昭和55年、23歳のとき。知り合いもなく、移ってきたばかりの頃は心細さのあまり「ずいぶん暗い町だ」と思ったという。

「最初は漆黒の闇でした。でも自分のかかわり方、見方が変わったら、闇の空にいくつも星が輝くようになった。それが、映画づくりだったと思います」

撮影は早朝から深夜まで続くこともしばしばだったが、体調管理のために問診と血圧測定を必ず実施した。薬の飲み忘れがないかをチェックし、楽しい現場づくりを心掛けた。

「撮影中はみんな気が張ってるから、ちょっとのケガくらいではへこたれないし、持病があってもなぜかピンピンしてる。マイナス20度の撮影のときも、誰一人風邪をひかなかっ

▲第3作「いい爺いライダー」での記念写真。右から2人目が代表・故原田幸一さん

▶上/クライマックスの火事シーン。なかなか燃えず、撮影中に灯油を買い足しに走った（第4作）
中/中央が看板女優の山崎良子さん。ライフルを持つ手もサマになっている（第4作）
下/厳しい冬の暮らしは穂別の歴史でもあった（第5作）
▼上/田んぼでの「刈り取り清め式」の様子。減反政策が進む中、80年代には皇室献上米もつくられた（第1作）。下/ストーブや竹の枕で飯場を再現。「ただ寝ているだけだから」と口説いて参加してもらったが、冷えきった布団に寝るのは演技以上に大変だった（第5作）

た。撮影中は死んだらだめ、あなたの代わりはいないんだよ、そういって励ましあってましたね」と中澤さんは言う。

悪役も看板女優も

今回は、キャスト、スタッフそれぞれの方から話を聞くことができた。悪役・宮田重晴さん(78歳)と看板女優の山崎良子さん(77歳)。スタッフでは衣装チーフの丸山範子さん（71歳)、絵コンテ、スクリプター・編集の本多紀子(67歳)さんだ。

「春に免許の更新をしたんだけど、目も悪くなって耳も悪くなって……」と切り出した宮田さんに、「この会は、『俺たちに明日はない』懇親会だからね」と山崎さん。ふたりは同じ昭和15年生まれだ。

「最初、町の風呂屋で映画出ないかって代表(原田さん)から声かけられたの。郵便屋だったからバイク乗れるだろうって言われて、ああいいよって気軽に引き受けたら、あんな映画だったとは」(宮田さん)

「自分の演技でああすればよかったって今でも思うシーンがあるわね。たとえば肩の入れ墨をばっと見せて相手のボスを驚かせるシーン。襟の下げ方がもっと大胆でもよかった」(山崎さん)

さすが看板スターだけあって、テレビや映画の見方も違う。

「小津の『東京物語』を見ていて思ったんだけど、原節子ってすごく棒読みだよねー」

映画の意味は、町の記録を残すことでもあった。事務局長で脚本を担当してきた斉藤征義さんは、高齢者への取材を重ね、お年寄りの話をひとつひとつストーリーに当てはめていった。

「自分たちの映画なんだから、穂別の記録として残せるものにしたかった。昭和30年代の炭鉱の賑わいぶりを今知っている人なんかいないでしょ。明日の命がわからない若い炭鉱夫たちが、夜、髪をリーゼント風にして街に繰り出していた様子とか」(山崎さん)

「山が鳴るっていうんだけど、マイナス20度を超えると寒さで木がしばれて裂ける音がする。そんな厳しい自然や暮らし、炭鉱の歴史、合併の歴史も、映画は伝えてくれてるんだよ」(宮田さん)

衣装、編集、映画へのこだわり

衣装を担当した丸山さんも、最初は試行錯誤の連続だったという。出演者の家を一軒一軒訪ね、採寸し、衣装として使えそうなものは持ち帰って手直しをした。ボランティアの女性たち5人でチームを組み、台本を読み、絵コンテを参考にしながらイメージを膨らませていったという。

絵コンテから編集までをこなすのは、本多紀子さん。編集の仕事はもっともスタジオを安く借りられる夜中に行っていた。第一作の制作時、崔監督は20回以上穂別を訪れたというが、ダメ出しが何度も出て、再撮影も行われた。

「編集は憎まれ役だと言われました。素人だからなんて言い訳にならない。それだけ真剣、妥協しないことを教えてもらいましたね」と本多さん。

映画は子どもの運動会ビデオとは違う。協力してもらったからといってその人たち全員をフィルムに収めるということはしない。第一に優先すべきは作品のクオリティを高めることだからだ。それゆえ、出演者は以下の3点をよく理解している。すなわち、①待ち時間が長いこと、②同じシーンをいろいろなカメラワークで何度も撮ること、③しかし、最終的に使われないことがよくあること。

映画制作はすべて町民の手弁当だ。人によっては年金がここで使われたという。

「お金を払ってもらうような演技でないし、ロケ弁食べさせてもらえるだけでありがたかった」と山本さん。「叱られたりＮＧ連発してしょげてる人も、みんな一緒に食べたからおいしかった。あの味が忘れられないね」

人生１００年時代だからこそ

「人生１００年時代」と言われ、長く生きることより、どのように生きるか、その中身が問われるようになった。長年看護にかかわってきた中澤さんにとっては非常に重要なテ

▶上/前列左から衣装チーフの丸山さん、名悪役・宮田さん、看板女優の山崎さん。後列左から中澤さん、編集の本多さん
下/ 1992年に始まった植樹活動・マザーズフォレスト事業には崔監督のほか、有森裕子氏、奥泉光氏なども参加

●田んぼdeミュージカル委員会・中澤
☎090-9080-6063

ーマだ。

「映画を通して、ひとりひとりの輝きに出会ってきました。あなたのその声、その手が必要なんですと言い、自分がいなくちゃダメなんだとかえってくる。もちろん台詞覚えるのはタイヘンだし、何度も撮って結局使われなかった、なんてこともあるんだけどね（笑）」

次回作の本格始動に備えて、関係者の体力・気力づくりを意識していきたいと中澤さん。のべ１０００回を超えた全国での上映会もさらに広めていく計画だ。町民を集めてのメモリアル上映会も11月開催が決定した。

高齢者の生きがいとか地域づくりといった大義名分ではなく、一人一人の喜びに向き合いたいと中澤さんは締めくくった。

取材／浅井四葉

◀人気のししゃもパーカー、ポロシャツ

食べるだけじゃない、「ししゃもTシャツ」が人気

太平洋に面したむかわ町鵡川地区は、海の幸が豊富だ。町を代表するししゃもをモチーフに、ユニークな商品を開発、ひそかなブームを仕掛ける観光協会事務局長・荒舘康治さんに話を聞いた。

荒舘さん（43歳）は三笠市出身。大学は札幌、その後夕張で15年間、おもに映画祭のイベントに携わってきた。地域に貢献したい、新しいチャレンジをしたいとむかわ町観光協会に転職したのが7年前。その時の町長からのミッションが「ししゃも以外に特産品をつくること」だった。

「札幌から1時間と近い場所なのに、足を止めさせるほどの強い観光の目玉がない。最初の1年は、農家さん、漁師さんとともかく人に会って町の魅力について話し合いました」

ほとんど雪が降ることのない海側の鵡川地区は、一年を通してレベルの高い食材に恵まれている。カレイ、ホッキ貝、とうもろこし、鵡川和牛……。むかわが誇る特産品を紹介しようと、荒舘さんはブログ記事を書き、ネットショッピングができる体制を整えた。すると、札幌の飲食店からも直接取引したいと声がかかるようになった。

一方、形に残るものを作りたい、そんな思いから始まったのが、Tシャツやパーカーなどの商品開発だ。平成27年秋、物産展に協会メンバー揃いのユニフォームを着ようと考案したのがししゃもロゴ入りポロシャツ。これが大きな反響を呼び、商品化を決定。翌28年の秋にはデザインをブラッシュアップし、Tシャツ（２５００円）、パーカー（５８００円）の販売を開始した。３か月で５００枚を完売、メディアからも取材を受けた。

人気の秘密は、クオリティの高さ。観光地のTシャツだと品質は二の次ということが多いが、こちらは布もしっかりして長く愛用できそうだ。パーカーのフードには「骨粗鬆症予防＋抗酸化作用」の文字がプリントではなく刺繍されるというこだわり。取材中も、東京と大阪から仕事で来たという男性二人が自分と友達用にお土産を購入していった。

マグカップが欲しい、手ぬぐいを作って、などのリクエストはたくさんあるが、要望を叶えてしまうと人は関心を失ってしまうと荒舘さんは言う。だから、商品開発はゆっくりじっくりがちょうどいいのだそう。

「外から人を呼ぼうとする一方で、肝心の住んでいる人が外へ出たいと思っていたら本末転倒ですよね。観光、移住事業ばかりではなく、いま暮らしている人たちをフォローするような施策を増やしていきたい」

商品開発の次はどんな仕掛けを考えているのか、新たな挑戦を楽しみにしたい。

●むかわ町観光協会　☎0145-47-2480

◀右上/町の特産物直売所「ぽぽんた市場」。ししゃもはもちろん、新鮮野菜や手作りパンなども購入できる
左上/毎年夏に開催される「流送まつり」
下/むかわ観光協会にて。仕事で町を訪れた青年に荒舘康治さん（右）が対応

▶塩漬けワラビの乾燥作業をする女性たち（農村環境改善センターで）

ふるさとをリノベーション

家を出よう、仕事と仲間が待っている。藤里町社協の自立支援策

秋田県藤里町（ふじさとまち）

様々な事情で仕事をせず家にひきこもっている人が増えている。藤里町の社会福祉協議会は、そんな人を訪ねて福祉の拠点施設「こみっと」へ出かけてきませんかと誘った。その人に合った仕事があり、介護の資格を取る講習会も実施、仲間が作った美味しい昼食もある。今では協議会で心配した113人がいろいろな場所で働くようになった。菊池まゆみ会長らの、現場で学び、素早く柔軟に対応する姿勢が反映されている。

福祉の拠点施設が一堂に

県道137号バイパスを入って役場のある町の中心部に向かうと、商店街が軒を連ねている。店々は朝早くからシャッターを開けて準備、人々の姿もあり、昔と変わらない賑わいが感じられる。新たにカフェや人々が集うサロンなども登場しており、藤里町は住民みんなが郷土を愛して活動に当たっている町だということが感じられる。

商店街を抜けたところに藤里町の福祉関連施設が一堂に会する場所がある。手前にあるのが福祉の拠点「こみっと」と自立支援（生活訓練）を行う「くまげら館」。その先に町立保育園、広い広場をはさんで社会福祉法人藤里町社会福祉協議会の事務局、高齢者のデイサービスセンターと、生活支援ハウス「ぶなっち」がある。すべてが廊下で繋がっているので、職員たちが自由に往来している。

デイサービスに来る高齢者を乗せた車が到着して、二人の女性がにこにこ顔で降りてきた。若い男性が2人でぶなっちの玄関を掃除したり窓ふきをしている。初夏の庭には様々な植物が植えられ、遠くから保育園で学ぶ小さな子供たちの声が聞こえてくるのが嬉しい。

▲人気の手打ち蕎麦セット（¥500）

▲こみっとの製麺室でこみっとうどんを作る小玉さん

▼社協の建物と村岡事務局次長

▼自立支援施設「こみっと」と「くまげら館」（右）

福祉の拠点「こみっと」へ集まれ！

約束の午前10時を待たずに藤里町社会福祉協議会（以下「社協」）の菊池まゆみ会長が会議室に現れた。

「藤里の人口は3600人、高齢化率は42・9％（H27年）。高齢化率の高い秋田県の中でも2位で、高齢者のみの世帯が8割を超える集落もあります。若者が高齢者を支えるまちづくりでは限界があるため、町では社協を中心に、高齢者自身も支え手になるような仕組みを推進してきました。私も10数年前から社協に勤めて、高齢者の家を戸別訪問しましたが、その折仕事をしないで家で過ごしている人々が大勢いることに気が付きました。これは従来から行ってきた一人暮らしの高齢者を主軸にした活動とは違う、孤立する人を支える地域福祉活動を見直す必要があると感じました」と菊池さんは語る。

菊池さんは大学を出ると東京へ出て企業に就職、結婚して主婦業に専念していたが、3姉妹の長女であることからご主人を説得してUターンを決意した。平成元年のこと。福祉施設で働きながらソーシャルワーカーに必要な数々の国家資格を取得した。

藤里町では、高齢者の生活支援施策として「ぷなっち」等の入所施設を開設、日常生活を支えるデイサービス事業、配食サービス等の取り組みを行ってきた。しかしいま支援が必要なのは生活困難者、いわゆるひきこもりと言われる人々ではないか。彼らを自立支援できれば、社会復帰して支援する側に回り、地域の活性化にも繋げることができるようになると菊池さんは考えた。

町では菊池さん等の意向を聞き入れて、平成20年に自立支援施設「こみっと」を開設した。菊池さんたちは「こみっとへ来ませんか。ヘルパー2級の資格を取る研修会もあります、美味しい食事も提供しています、その仕事の手伝いもしてほしいのです」と、気になる人を一軒一軒を回ってパンフレットと参加申し込み用紙を手渡した。

「その結果、113人から情報提供の了解がありました。この数字が藤里のひきこもり者数のように捉えられていますが、高齢だけれど社会参加したいという人も含まれています。やがて多くの人がこみっとへ顔を出し、様々な形で仕事をするようになりました」と菊池さんは語る。

こみっとへ最初にやってきたのが小玉栄さん（48）だった。国立大学を出て東京の情報処理会社に勤務していたが数年後にUターン、地元で働くつもりで就職を探したがうまくいかず、家で過ごすようになった。社会参加や社会復帰するチャンスがなくなると孤立無援になり、社会的にも孤立していく。そんな人にチャンスを提供するのが社協のもう一つの仕事になった。

菊池会長と村岡順一次長が「こみっと」へ案内してくれた。小玉さんは11時30分にオープンする食事処「こみっと」の準備で、調理室で手打ち蕎麦作りに追われていた。食事処こみっとで若い人の指導にも当たっている他、キッシュ作りの名人でもある。「誰かに必要とされている感覚は悪くない」と小玉さんは言う。開発した地元特産の天然マイタケ入りのキッシュは、町の「森のえき」でも人気の商品になっている。

2階の一室では介護福祉士実務者の資格を取得するための研修会が開催されており、10名ほどが受講していた。週5日の授業を6カ月間受講するきついコースだが、定年後は福祉関係で働きたいと言う中高年男性も増え、町外からも参加者が多い。廊下の壁には近隣市町村の事業所からの求人票が貼ってあり、専門家による仕事相談、仕事訓練を行っている。

別の施設を見学するため「こみっと」を出て、12時過ぎに戻ると、食事処は研修受講者

▲高齢者生活支援ハウス「ぷなっち」の玄関を掃除する若者たち

▲介護福祉士実務者養成研修会に参加する男性たち

▶デイサービスに来た高齢者と語る菊池会長

▲壁に張り出された求人票

などでほぼ満席になり、ウェイターの青年が忙しく働いていた。人見知りが激しかったというが、いまでは丁寧に穏やかに対応する青年は食事処の人気者でもある。
　農村環境改善センターへ向かう車の中で菊池さんは「こみっとに登録している人たちは、こみっとは自分たちが頑張って支えてきた職場だという自負を持っています。年取ってもずっと働くつもりです。でも仕事はそれほど多くないので、農村環境改善センターのレストランや山菜作業場で働いてもらうようにしています」と言う。フルタイムで働く人、短時間パートで働く人など働き方は異なるが、社協では皆に欠かさず報酬として支払っている。

住民協働で食文化を継承

町の西部、白神山地の麓には湯ノ沢温泉、町の物産館「森のえき」、丘の上には「ホテルゆとりあ藤里」がある。その対岸の丘陵にあるのが農村環境改善センターで、天然温泉を有する宿泊・研修施設が完備され、町民の交流の場として活用している。同センターは社協が「こみっと」の自立支援事業に次いで、全住民を対象にした人材派遣事業「プラチナバンク」の拠点としている施設で、レストラン経営と山菜等を加工販売する工房での作業を担っている。

▲ワラビ畑はお年寄りが大好きと語る菊池会長

　工房では、ワラビを塩漬けして天日で乾燥する作業が行われていた。塩漬けしたワラビはナマとひと味違う美味しさだが、さらに乾燥ワラビは保存食として珍重され、藤里の特産品になっている。
　昼近くになると山菜名人がネマガリダケをどっさり持参してきた。これもレストランの特別メニューに加えられ、残りは茹でて保存食に加工したり、森のえきで販売される。
　レストランの昼食は、10種以上の料理が好きなだけ食べられるバイキング形式で、その日のメニューはサバの竜田揚げ、フキの煮物、ワラビの和えもの、卵焼き等が大皿で並べられた。白神の清流で栽培したご飯とタケノコ入りの味噌汁、食後は珈琲や紅茶も。当日は町の民生委員グループがバスで来店したため、厨房では社協の職員も手伝って大忙し。普段は20～30食だが、今日は50食以上を用意したと言う。
「お肉やお魚料理をメインに、家の周りにある野菜や山菜を使った昔からある家庭料理を提供しています。これが最近は懐かしがられて喜ばれるの。このあと入浴するのが楽しみだよ」と台所仕事が一段落した女性は胸をなでおろした。奥の和室では週一度は昼食にくるという高齢者グループが、これから入浴とカラオケを楽しむと言っていた。
　菊池さんらは農村環境改善センターへ向かう前に、町が管理するワラビ畑へ案内してくれた。手入れが行き届いた広大なワラビ畑で、まだ所々に太ったワラビが生えている。
「ここへは高齢者たちを良く連れてきます。さあ皆さん、好きなだけ摘んでというと、車椅子の人がいきなり立ち上がって走り出すんです。嬉しそうで楽しそうで真剣そのもの」と言う、菊池さんも目を輝かせている。
　同様に、デイサービスに来た高齢者にフキの皮むきを頼むと、皆が一斉にはじめて、「もっとないのか」と詰め寄ってくる人もいるとか。
　昔から馴染んだ生活は、たとえ認知症になっても覚えている。仕事がある、役に立つ、人に喜ばれたいという思いを皆が抱いている。それをもっと大切に理解しなければならないと菊池会長は思っているのだ。

文／浅井登美子　写真／小林恵

▲農村環境改善センターの建物。美しい庭園も見もの

▶右/人気のバイキング料理
左/10種の料理をお代わりしていただく民生委員の人たち

●藤里町社会福祉協議会
☎0185-79-2848

旅する大工集団「パーリー建築」（新潟県十日町市）

全国各地の空き家を地元の人と一緒にリノベーションを行う若い大工集団で、主宰は宮原翔太郎さん。新潟県十日町市では、築100年の2階建て古民家の改修を行った。古民家は短期滞在や移住者のための「ギルドハウス」として活用され、延べ700人が利用、現在12名が共同生活をしている。

宮原さんは、広島県尾道市でゲストハウスのリノベーションに半年間携わったことで、地区のニーズに応じた建築方法を学んだという。住民が大勢関わることで、地区にある木材や貴重な廃材を生かした改修が出来、後のメンテナンスや手直しも住民が行える。しかも費用も安い。多少素人っぽさが残る改修スペースは、カフェや雑貨店などに生まれ変わり、地元の人や若者から新鮮で親しみを感じると好評だ。「空き家を利用して、若者やお年寄りなど様々な人が関わる機会が増えれば、地域活性化にもつながる。リノベーションした場所が住民の交流の場になってほしい」と宮原さんは語っている。

十日町市では、NPO法人桂公園こどもランドプロジェクトの事務所&遊具施設棟の設計もパーリー建設が手がけた。白いシンプルな木造2階建物で、1階には懐かしい幼児用自動車が置かれている。同公園は「子供を連れて行ける公園が欲しい」という市民有志が立ち上げた公園で、幼児、親子が楽しめるゴーカートコースがある以外は親子でのんびり寛げるスペースが中心。地域の婦人たちがボランティアで植物等を管理しており、平成29年に国土交通省の「公園・夢グランプリ」大賞を受賞した。

ウミガメや身近な魚と触れ合う「むろと廃校水族館」（高知県室戸市）

今年4月に室戸岬町の旧椎名小学校にオープンした「むろと廃校水族館」が話題になっている。旧校舎や屋外プールを活用して、ウミガメや身近な魚介類約1000匹が間近に見られることから、3カ月で来館者は3万人を超えた。

旧椎名小学校は鉄筋コンクリート3階建ての校舎だったが平成18年に廃校した。この堅牢な施設を生かして、2階には3・5mの大水槽1基と3mの大水槽2基、さらに魚別に20基の水槽が設置され、ここに50種1000匹の魚が収容されている。また25mの野外プールでは悠々自適に泳ぐウミガメや巨大魚、稚魚の群れも観察できる。

水族館を運営管理するのはNPO法人「日本ウミガメ協議会」（大阪市）で、若月元奇館長は長年室戸市でウミガメの生態調査や保全活動をした経験を活かして、水族館開設に当たった。室戸漁業組合の協力も大きく、定置網にかかった魚を水族館のスタッフが貰い受けて飼育する作業を続けてきた。特色はウミガメで、貴重なクロウミガメをはじめ4種のウミガメがおり、時期を見て海に戻す作業を続けている。3階は室戸漁業組合の資料を展示、5mのミンククジラの標本もある。

入校料一般／600円・開校9時～18時 年中無休、「むろと廃校水族館」
☎0887－22－0815

全国過疎問題シンポジウム 2018 in やまぐち

平成30年10月25日㈭・26日㈮

“田園回帰”
～地方に若者を呼び込む～

■全体会／山口市 山口県総合保健会館 多目的ホール
10/25㈭ 13:00～17:00

- 平成30年度過疎地域自立活性化優良事例表彰式
- 基調講演
  「田園回帰の時代～人と仕事を取り戻す1％戦略～」
  藤山 浩（一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所所長）
- パネルディスカッション
  コーディネーター／指出一正（「ソトコト」編集長）
- 交流会18:00～　・山口市・ホテルかめ福

■分科会・現地視察
10/26㈮ 10:00～16:30

第1分科会（長門市・ラポールゆや）
- 過疎地域自立活性化優良事例発表会
  コーディネーター／宮口侗廸（早稲田大学名誉教授）
- 現地視察（元乃隅稲成神社・センザキッチン）

第2分科会（萩市・旭マルチメディアセンター）
- パネルディスカッション
  テーマ：人口減少社会への挑戦
  ～地域おこし協力隊の力を活かす～
  コーディネーター／田口太郎（徳島大学総合科学部准教授）
- 現地視察（萩・明倫学舎・道の駅萩しーまーと）

第3分科会（岩国市・ハーモニーみわ）
- パネルディスカッション
  テーマ：地域みがきが人を呼ぶ～関係人口を増やす～
  コーディネーター／檜谷邦茂（一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所監事）
- 現地視察（FAM'Sキッチンいわくに・錦帯橋）

第4分科会（周防大島町・山口県大島防災センター）
- 過疎地域自立活性化優良事例発表会
  コーディネーター／図司直也（法政大学現代福祉学部教授）
- 現地視察（瀬戸内ジャムズガーデン・道の駅サザンセトとうわ）

編集後記

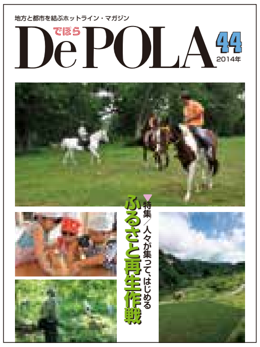
▼西日本豪雨災害では広島、岡山、愛媛など9府県に多大な被害が生じ178ヵ所の避難所で未だ3600人が避難生活を強いられている。北海道では小中学校40校以上の児童生徒が段ボールベッドを組み立て、災害食を作る「防災学校」を実施、災害時に命と健康を守る活動を実施している。地域のために自分に何が出来るかを考える日々である（k）。
▼ネットメディア時代、地方の活動や企業情報を都市でも容易に知る機会が増えている。しかし地域住民や農家の高齢者がその情報を共有する機会は少なく、ある会の長老は担当者に「パソコンに向かう前に集落をもっと歩いて欲しい」と訴えた（a）。

De POLA No.52
［でぽら］2018年
発行日／平成30年10月5日
発　行／全国過疎地域自立促進連盟
〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602
http//www.kaso-net.or.jp/
編集／㈲編集工房アド・エー

DePOLA 「でぽら」NO.52
平成30年10月5日発行
発行／全国過疎地域自立促進連盟 〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号 第一天徳ビル3階 ☎03（3580）3070㈹

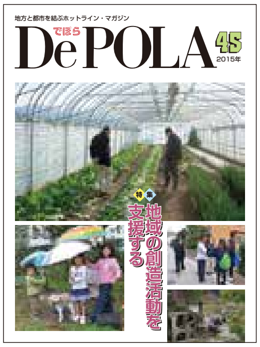
［DePOLA］Back Number（近刊号）

No.44 人々が集って、はじめる――ふるさと再生作戦



「美味しい」の感動をつなぐ島（山口県周防大島町）貴重な動植物と農業青年を育む里山（鳥取県日南町）四ケ村の棚田と肘折温泉で創るふるさとのにぎわい（山形県大蔵村）主役は子供たち（福島県伊達市月舘町）馬にふれ、馬たちの時間で暮らす（北海道浦河町）ボランティアが続ける森や里山支援/JUON NETWORK 森の楽校·田畑の楽校 産学官でオホーツク地域産業の創成を/東京農大オホーツク実学センター
平成25年度過疎地域自立活性化優良事例/特定非営利活動法人 奥矢作森林塾、一般社団法人 なかわり生姜山農園、雪浦ウィーク実行委員会、寄ろ会みなまた、若松ふるさと塾、会津山都そば協会

No.45 地域の創造活動を支援する

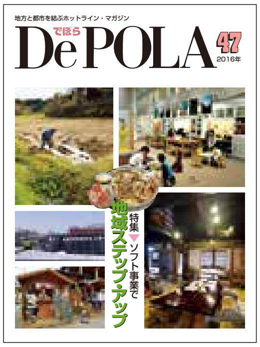


集落再生をめざす小さなユートピア郷/大宮産業·みやの里（高知県四万十市西土佐）移住してくる家族をバックアップ（長野県伊那市高遠町）地域で安心して幸せに暮らす/ゆうばりコンパクトシティ構想（北海道夕張市）各分野の専門家が地域に根を張って/対馬市島おこし協働隊（長崎県対馬市）自然と地域の中で輝いて学ぶ「島留学」県立隠岐島前高校、島まるごと図書館プロジェクト（島根県海士町）学生の提案をビジネスに生かす/十日町市「トオコン」、農業体験·ボランティア活動に無料バス（新潟県十日町市）風土に合った「小さな農業」の創出（山形県舟形町）山里の暮らしの知恵と資源を生かして/もくもく市場·栃尾里人塾（岐阜県郡上市明宝）地域の見守り役も担って/予約型乗合タクシー（福岡県八女市）

No.46 若者の地域貢献活動

島の柑橘園を受け継ぐバンドマンたち（愛媛県松山市中島）農を軸に「生きがいの仕事作り」/楠グリーン村（山口県宇部市）高根の暮らしを明日へ繋ぐ（新潟県村上市）450人の子供たちの第二の故郷/暮らしの学校だいだらぼっち（長野県泰阜村）奄美大島他で大学生が「島キャン」休耕地を花と蜜蜂の丘に/油木高校（広島県神石高原町）地域の農業と共に/名久井農業高校（青森県南部町）道北農業の未来を担う/北海道名寄産業高校（北海道名寄市）
平成26年度過疎地域自立活性化優良事例/ビジョン早田実行委員会、もんてこい丹生谷運営委員会

No.47 ソフト事業で 地域ステップ·アップ



豊饒な大地から"美味しい"発信、ブランド作物&グルメの里（青森県つがる市）人、モノ、想いが行き交う交差点「こってコテいけだ」（福井県池田町）男鹿の魅力をパワーアップ、減農薬栽培と放棄水田の活用（秋田県男鹿市）バイオガスプラントの余熱利用、チョウザメ、マンゴー飼育（北海道鹿追町）全国が熱い視線を注ぐ「日本一の子育て村」（島根県邑南町）地場産業·伝統技術を継承する小学生の「たたら体験学習」（島根県奥出雲町）作って、食べて、歩いて実感、山の暮らしをナビゲート（山梨県笛吹市芦川）暮らしの中で街並み保存と資源活用、北国街道今庄宿（福井県南越前町）海の道·神々の島、壱岐市立「一支国博物館」（長崎県壱岐市）駅舎は若者や町民活動の発信地「えき·まちネットこまつ」（山形県川西町）

No.48 地域の伝統技術を継承する

「オケクラフト」オケクラフトセンター森林工芸館(北海道置戸町) 島民の暮らしと共に「久米島紬」(沖縄県久米島町) 葦原の育成と「茅葺き屋根」の修復(宮城県石巻市北上町) 幻の手工芸品「金唐革紙」の復活(福岡県築上町) トータル林業をめざして(長野県根羽村) 天空の里で[石積み学校](徳島県吉野川市美郷) [地域おこし協力隊員が地域伝統の技を学ぶ] 奥会津編み組細工(福島県三島町) 雄国根曲竹の竹細工(福島県喜多方市熊倉町) 3人の隊員が蕎麦打ち修業中(喜多方市大和町) 鉄に魅せられて鍛冶職人に/鍛冶工房金床·秋田和良(広島県安芸太田町) 新感覚の五箇山和紙を世界に発信(富山県南砺市五箇山)
平成27年度過疎地域自立活性化優良事例/大野地区公民館、五名活性化協議会、田幸ふるさとランチグループ、一般社団法人 IORI倶楽部

No.49 住民協働で地域の賑わい

参画·協働して自治力を回復（島根県雲南市）[ブルーリバー]を設立して地域再生（広島県三次市青河地区）歴史文化を新たな視点で（北海道江差町）房総［山のまち］に賑わいを（千葉県鴨川市清澄·四方木地区）「小さな村g7サミット」を誕生させた村（山梨県丹波山村）山里の暮らしを学び、支援する（群馬県南牧村星尾地区）日本一を誇る[土佐天空の郷]棚田米（高知県本山町·本山町農業公社）[有機の里づくり]事業（青森県新郷村）福島大学[むらの大学]in小高（福島県南相馬市小高区）[津波模型班]の活動（岩手県宮古市県立宮古工業高校）水と緑の“火の島”口永良部島（鹿児島県屋久島町/貴舩庄二）

No.50 過疎への挑戦―農山漁村50年の歩み

[あのムラは、あの人は―45年を経た島根県の山間集落]（津和野町日原滝谷集落、益田市匹見町芋原集落、邑南町瑞穂地区）[出稼ぎを辞めて地域産業を興す、新農業経営に挑戦してきた秋田県の若者たち]3夫婦で原木しいたけ栽培（湯沢市旧雄勝町）、「出稼ぎも楽しかった」、契約栽培と比内地鶏で近代化農業を（大館市比内町）出稼ぎでまちを支えてきた男たちはいま自然を活かした事業に（鹿児島県大崎町）[地域の夢紡ぎ人] 歴史·文化の町の「牛乳生産」（新潟県出雲崎町）、天草の人と海山が育んだ極上品（熊本県上天草市）、品質第一で「農」をブランド化（北海道共和町）、育てて獲るホタテ漁（北海道猿払村）,多様性に富んだ森のような地域に（岡山県西粟倉村）平成28年度過疎地域自立活性化優良事例／NPO法人がんばらまいか佐久間、NPO法人ふるさと、NPO法人うちのの館、真田いこい茶屋

No.51 田舎で起業·夢の実現

[アキ工作社]の〝国東時間〟（大分県国東市安岐町）[菊池製作所]菊池功社長（福島県飯舘村·南相馬市小高）羊と創るクリエーター集団（北海道士別市）[シェアビレッジ町村]（秋田県五城目町）漁業生産組合[浜人]の挑戦（宮城県石巻市北上町）[健一自然農園]大和茶（奈良県山添村他）[源流どぶろく上代]（鳥取県伯耆町福岡地区）[くめなんガールズファーム]（岡山県久米南町上籾地区）農業法人[賀茂プロジェクト]（広島県東広島市豊栄町）魅力燦々、喜界島特産品（鹿児島県喜界町）やさい村信州高遠藤沢郷[こかげ]（長野県伊那市高遠町）

★詳しい内容については http://www/kaso-net.or.jp を参照ください。残部が少ないため進呈出来ない号もあります。